

---

# 喰

小林 訝

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

喰

### 【Nコード】

N8392T

### 【作者名】

小林 訝

### 【あらすじ】

これは己が己として生きるために、喰らうことを拒絶し続ける少年と、喰らい続ける少女の、お話。 現代の非似日本が舞台です。若干シリアス寄りの一人称小説。メイン主人公はヘタレ少年で、サブ主人公がある意味最凶少女。そんなキャラが嫌だという方は来ていただいたのに恐縮ですが、戻るをお勧めします。

# 1 嬉しくない指名

気まずい。

何気まずいって、この部屋の空気。

24畳あるこの和室、電気も付いてて明るいの、その空気は重い。

一番の原因は、険しい顔をして眉間に皺寄せて、あぐらをかいてる、親父。

向かい合ってるオレの事も考えて欲しい。

ただでさえ心臓に悪い話を今さっき聞いたばかりだって言うのに、まだ気難しい顔をしてやがるし。

そろそろ何か言っしてほしいんだけど。

「仕方ないな」

「読まれた!？」

ぎくりとしたオレをそのままに、親父が「はああああっ」と大きく息を吐き出した。

「人手が足りない」

「いや、足りなくないだろ？」

「足りない。自分のトコの不始末だ、こっちでカタを付ける必要がある」

「……現地に任せるって出来ないのかよ？」

「出来なくもないが、そういう訳にいかねえんだよ」

「って、行き成り素になんっ!!」

じろりとオレを睨んで、もう一度、溜息。何だよそれ、どーいう意味だっ!？」

「お前、何でここにいるかわかってるよな？」

「呼ばれたから」

「その理由だよ、理由」  
ぐっ。

……わからないでも、ない。

視線を右足へと落とす、そこにあるのは一振りの刀。親父からの預かり物で、オレのじゃないそれ。

「そーだよ、それだ」

げんなりと声をあげる。つーか人の視線の先を追うなよ。

「で？ オレにどうしろって？」

「それ持って言うて来い」

「あつさり言うなーっ!!」

「しよーがねえだろ。仕事だ仕事」

「いや、オレ 「つべこべ言うなよ、シメるぞ？」

くっ……実の息子を脅す親がどこにいるんだよ。 て、ここに  
いるわな。

「しよーがねえだろ？ 話を通した矢先に、コレだ」

ぺらぺらとA4サイズの紙をうんざりしたように振って示す。

さつき聞いた、心臓に悪い話つてのがソレ。

「無闇に人を襲い、喰った。ったく、バカかっての。ニュースでガン報道されてるじゃねえか、こっちの立場も考えろっての」

そんなモノ考えてるなら、そもそも掟破って出てかねえって…。

「何だ？ 何か言いたい事でもあんのか？」

「別に。ただ、問題になったのオレは知らなかったけど、その時の事考えたらこうなるってわかったんじゃねえかなって思っただけ」

「まーな。協会の方にも注意は呼びかけてたんだがなあ」

その結果がコレか。

23才女性、獣に食い散らかされたようなバラバラ死体で  
発見。

今日は朝からそのニュースだよ、どこの報道でも。

「ま、そーいう事だ」

「どーいう事だっ!!」

「言わねえとわかんねえのかよ？ ったく。被害がなければ、発見地の管理者に任せる。その流れでよかった。だが、アイツら掟を破

った。ここを出て行く時、更にコレ。むしろこっちのがひでえな」  
「確かに、それは酷いとは思う」

追ってなら、業界関係者なら、ともかく。何の関わりもない一般人、それを、自分の欲望のままに屠った。

「んで、こっちでカタをつける事になった。該当区域の管理者にはこっちから話を通してあるから、行つて来い」

「何でオレなんだよ…」

「人手がた足んねえんだよ。逃亡者は4人、現在進行形で追つてもかけてある。だが、コレの犯人は1人だ。それをお前に当たらせる。こいつだけでいい」

「そいつって」「ああ、三知みちをかわしたヤツだな」……「やっぱり」

あつさり言うなよコンチクシヨー。

「オレにどうこう出来ると思つてるわけ？」

「2人組だったからなあ」

うおい！？ 暢気な口調で言うなよっ！

っーか視線オレから逸らしてんじゃねえか！！

「ま、何とかなるだろ？ むしろ、何とかしろ」

「無責任な事言うなああああつ！！ 親父が行けばいいだろ！！」

「それが出来たらとつくにそーしてらあ。できねえから、こーして、末っ子のお前に頭下げてんじゃねえか」

下げてねえええええ！！

全つ然、下げてねえだろ。すっげー上から目線じゃねえか！

「出来ねえって？」

「無茶だろ、幾ら何でも…」 オレなんか」

「あつそ。んじゃ、ソレ返せ」

指差す先は、オレの右膝。じゃねえ、刀。

確かにコレは親父の持ち物で、オレのじゃねえから、そー言われたら返すしかねえんだけど…。

「元々、お前が持てる代物じゃねえのに、オレがお前のためを思っ

て貸してんだからなあ。そこんとこわかって欲しいよなあ。色々大変なんだぜえ？ 他のヤツラから言われてよお」

泣き落としかよ、上から目線の。っーか結局脅してんじゃねえか……。

何だよコレ。

結局、アレか？ オレが行くしかないっていうパターンか？

「どーする？ 返すか？ 行くか？ 男なんだからはっきりしろい！」

この場合、男とか女とか関係ねえだろ…。

何だよこの傍若無人ぶり。

いつも思うが、本当に、無理難題言い過ぎだよ、この親父。

しかも我儘だし。

我が親ながらどーしようもねえっーか…。

「おい、返事」

言いつつ、何で右手をこっちに出してんだよ。無言で返せつつつてんじゃねえか。しかも半目で睨むなよ、こええんだよ、親だけど！

「……………わかったよ」

「何が？」

「行けばいいんだろ、行けば！」

「最初から素直にそー言えよ」

「……………行きたくて行くんじゃねえよ、脅されて行くんだよ、オレは」

「誰も脅してねえ」

あっさりよ、あっさりとおお！？

脅してない顔か、それが！ 思いつきり睨んでるじゃねえか！！

「で、どこだよ、場所？」

「あゝ。アイツラな、多分に調子に乗ってるだろっからなあ、移動してねえだろっうな。一応、外に出さないよう管理地囲むように境界張ったっつってたから」

は？

管理地囲むって、どんな巨大さだよ。つーかそんなもん作れる腕があんなら、アイツラ簡単に捕まえられるんじゃないの？ それとも何か？ 結界だけは作るの得意なんですけど、戦うのって苦手なんですよねー（はあと）とか、そういうパターンか？

やってらんねえ。

「何暴走してんだよ」

「人の思考に突っ込むなよ！」

「いや、お前が何考えてるかは知らねえが？ 顔に、やってらんねえ、とか書いてあんだが？」

……………。何この親父。

「ま、いいやな。管理者も忙しいんだよ、あっちこっち、管理地外からも仕事入るからな。オレよか忙しいだろ、多分に」

「……………親父と同じヤツ？」

「いや？ ま、“北斗”以外で国内唯一のSSクラスだからな。しよーがねえ」

人間じゃねえな、それ。

どう考えても人外だ、どこの種族かはわかんねえけど。

「“北斗”と違って自由に動き回れるから、あっちこっちから引っぱりだこなんだよ」

「ああ、なるほど。親父ら、誓約あったもんな」

「一応組織の要だからなー。ああ、メンドクせえ」

メンドクせえつつってるよ。いいのかよ、それ…？

協会トップの人間がコレでいいのかよ、絶対間違ってるだろ…。

「じゃ、そういう事で」

「場所聞いてねえよ？」

「ウツク統京、第3指定26区」

「報道のあったトコだな」

「そ。結界に引っかけたって話が来てねえから、まだ、そんなにいるはずだ」

「広い」

「まーそらな。3市3町2村だからな。広いだろうな」

「もう少し範囲狭まらないのかよ？」

「……1市2村ってどこか」

「狭まりすぎだろ!？」

「身を隠すなら森の中って言うだろ？」

「木だよ、木!！」

「細けえ事を気にすんなって、男なら」

「どこがだよ! ってか、関係ねえって、男とか!！」

「ま、とにかくだ。その3つの中心が山だから、そこだろ。多分に調子こいてるからなーアイツら。ま、追って振り切ってあっちの方まで逃げてんだ、そら、調子にも乗るだろうなあ」

「……返り血浴びた格好、街中じゃ目立つからな」

「そついう事」

「管理者の名前は? 一応、挨拶くらいはした方がいいんだろ?」

「必要ねえよ。話は通してあるし、こつちでさっさとカタ付けねえと、向こうが出ない訳にいかなくなるから。そうになると、オレの立場以前の問題になるからな」

「一族の問題になつちまうって事か」

「そーゆう事。だから、あっちとしても、手を出せないってのもある。今んとこな。……つたく、コレが無けりゃあなあ、もう片付いてたんだろつがなあ」

ぺらぺらとA4の用紙を忌々しげに眺めて、弾いた。

「この親父、これでよく一族のまとめ役とか協会のトップとかやってられるよな。」

どこをどう見ても、ちょい悪親父ってか、ただのヤンキー……

ああ、ヤンキーのヘッドつてヤツか。

ちらりと親父を見てみる。けつとか言ってる、けつ! って。

うわあ、すげー似合ってる。ハマリ過ぎ、絶対そつちのノリだ。

暴走族だよ、間違いないよ、この親父。

「ま、一応言つとくか。危ねえっちゃ、危ねえから」

「は？」

「乃木のぎの管理地なんだよ」

「乃木？ …… って、あの乃木？」

「どれを考えてんのか知らねえが、多分そつだ」

「わかんねえのに頷くなよ！」

「んじゃ何だよ？」

「聞くなよ！ …… 五大霊場の一つじゃなかったか？ 乃木って」

おお、親父の目が丸くなつたぞ？

どういつ反応だ、これ。喜んだらいいのか？

「…よく覚えてたな」

「ばあちゃんに聞いたから」

「オレの話じゃねえんか」

「親父に聞いた事あつたつけ？」

「した」

「初耳だ」

「いや、話したね」

「聞いた覚えない」

「言つたつうの！」

「知らねえつてのー！！」

「強情だな」

「親父に似たんだろ」

「…… はー。沙夜やよひ、聞いたか？ すつかり小生意気に育ちやがった

よ、この野郎は。親を親とも思わねえんだからよお」

「母さんの写真に泣きつくなよ……」

気持ち悪いから。

大の大人が… って、親父、本当にデカイ筋肉質な男だし、それが写真に頬を摺り寄せながら泣きついてたら気持ち悪いだろ？ 普通

に。変わって写真の中の母さんの時間ってば13年前で止まつてて、40代そこそこで、息子のオレが言つのも何だけど、めっちゃめっちゃ



「嬉しそうに言うなよ」

「まあ、それはそれで面白そうかなと」

「……………。この親父、いつか絶対、殺る。」

「んじゃ、行ってくるよ」

溜息交じりに告げて、立ち上がる。

右手にはしつかりと……………借り物だけど、愛刀を持って。

「おお、気合い入れて逝って来い」

「逝ってどうすんだよっ!!」

「男が細かい事にすんなって」

「どこがだっ!!」

は。疲れる。この親父、マジで疲れる。もうとつとと退散しよう、そうしよう。

行く前に脳の神経焼ききれるっつーの。

「あゝ、十郎太<sup>じゅうろうた</sup>。一つ言い忘れた」

襖を開いてとつとと閉めようとしたオレにそんな声。

まだ引き止めやがるかこの野郎。

「何だよ？」

「カリパクすんなよ？」

はあああ!?

行き成りなんだよ、それ!

「誰がするかっ! つーか、いい年した親父がそんな言葉使うなよっ!!」

「父は若いコと仕事する機会も多いのだ、息子よ」

「妙な学習すんなっ!!」

も、何なんだよ……………この親父。

思わず頭を抱え込みそうになって、踏み止まって親父を睨む。くっそ、何でニヤニヤしてんだこの親父!

「きつちり返すわ、ぼけえっ!」

「ははっ、そーかそーか。迷子になんねーよーになあ」

「誰がなるかっ!」

ばちんっ！！

渾身の力を込めて襖を閉じてやりましたよ。

ささやかなオレの抵抗ですよ。こんちくしょー！。

親父のバカ笑いが聞こえる気がするが、いやきつと気のせい。

…「まったく、素直じゃねえっつーか。あの親父。普通に言えねえんかよ、普通に。」

生きて帰って来いって。

思わず口元が緩む。……って、何喜んでんだよ、オレ。

「勝てねえなあこんちくしょー」  
呟いて。

これが本当の負け犬の遠吠えってか。

右手にしっかりと握った刀を見やって、改めてがっくりと頭を落としました。

## 2 KEEP OUT

バスに電車で新幹線、更に電車を乗り継いで。

「遠っ……」

車窓から街を眺めながら呟く。

都会だなー、鉄筋の建物ばかりだよーすげーなあ………って、もう感動終ったわー!!

くっそ、まだ着かねえのかよー。暇だよー退屈だよーありえねええ………。

「はあ」

電車で揺られ揺られ、立ってるのは苦痛でも何でもないが、この時間が苦痛だ。

暇すぎて死にそう………。

ぱちっ。

一瞬、軽い電磁ショックが躰を通り抜けた。

やっとか、と胸を撫で下ろす。管理地を囲むように結界を張ってある、と言ってたから、今のが境界なんだろう。

どうやら目的地までもうすぐらしい。

………とは言え、国内で上から数えた方が早い敷地面積を誇る管理地だけに、本当にすぐ着くかどうかどうか怪しいんだが。

つーかコレだけの広さ囲めるならすぐに………て、ああ、それはダメなんだっけか。

ああ、めんどくせえ。

+++++

で。

「着いた…」

オレ泣きそう。よくわからんが、すっげー達成感がある。

結局アレから30分も電車に揺られたんだが………。どんだけ広いんだよ。つーかコレ、本当に管理しきれてんのか？ ……いや、オレが未熟なだけかもしれないけどさっ！

「とりあえず、現場…」

報道されていた場所を確認しとかないと。臭い確認しないと。阿呆みたいだけど、必要だし。

コートポケットに手をつ突っ込んで、折りたたまれた紙を取り出す。

「つて、何じゃこりゃあ！」

叫びを上げてから、はっと気付く。周囲を見回すと………通りすぎる人の注目の的だった。

……。

こほん、と咳払いを一つ。その後でオレが何ごともなかったかのようにその場を去ったのは当然だ。ちくしょーいきなり恥かいたわ！

くそつ、親父の野郎。こんなとこまで来て！！

折りたたまれた3枚の紙の一番上には、親父が満面の笑みでVサインかましてる写真があった。オレには文句を言う権利がある！

絶対ある！！これは当然の権利だっ！

「何でこんなモノが混じってんだよ……」

丸めてコンビニの可燃ゴミ箱へ投げ捨ててやった。ざまーみろっ！！

……さて、気を取り直して。

事件のあった現場は、公園だ。

駅からそう遠くはない、駅周辺の商店街から住宅地への境目あたりにある、小さな公園。

手荷物は背にかけた細長い袋だけ。中身は愛刀。真剣さながらつてかソレよか性質の悪い代物だけど、オレの服装は学生服にコート。背中のコレも、竹刀が入ってるとしか思われないうらう。

地図と建物を見比べながらゆっくりと歩き出して、ちょっとだけ気になったから、かけていたメガネをずらしてみる。

「うへえ……」

思わず声に出して、慌ててメガネを掛けなおす。

五大霊場と言われているのは伊達じゃないな。こんなトコに住んだったら、敏感なヤツは神経イカれるんじゃないか？ ……その前に憑かれるか。まあ、そうならねーよーに、協会があるわけで。こんなトコで仕事してたら、嫌がおうにも腕上がるよな、そりゃ。

しっかし……。

その状態以上に、目を引いたのは、街をぐるりと取り囲むように覆われていた、薄い緑の幕。人間にできる芸当とは思えないよな、やっぱ。こんだけの管理地を囲む結界なんぞ。

隅々まで見えたわけじゃないけど、とりあえずそう結論。だってこの結果の中に入ったの電車で30分前だし。むしろ電車降りてから……ってえ、何で18分も過ぎてんだ！

くそ、親父のせいだつ！ 余計な時間取らせやがって。

歩くスピードを上げた。暢気にやったら日が暮れる。夜になつてご対面なんざしたら、万に一つの勝機が消える。

……すでに万に一つとか言ってる時点でダメか、オレ。

ええと、この先の銀行を右折……ああ、あれか、あそこ曲がったらすくな。

更にスピードを上げて、オレは角を曲がった。

曲がったんだけど……。

ってえ、何だよそれは！！ これはアレか！ オチってヤツか！

笑えねえ！！

流石に声には出せないから、内心思いつきり叫んだ。ありえねー。

現場近くまでやって来たオレの目に入ったのは黄色の帯。

KEEP OUT KEEP OUT KEEP OUT KE  
EP OUT 以下、エンドレス。

公園、立ち入り禁止。はい、終了。ダメダメじゃん。どうしようもない。

むしろ周辺の道路が封鎖されてる時点で終わってるよ。こんちくしよー。

ちらりと周囲を見ると、発見が昨日の明け方で1日経過してるっつーのに野次馬いるし。報道の方々が…多い事多い事。邪魔だなー。もしかして道路封鎖されてんのコイツらのせいか？ ああ、どうすんだよー。

……いや、ちよつと離れた所から飛んでくとかすれば気付かれはしないだろーけど。流石に未熟なオレでも…って自分で自分を未熟って言うのも問題あるけどな、事実だし！ ちくしょー。何かよくわかんねえが悔しくなって…じゃなくて。とにかく、オレでも一般人の目にも止まらぬ動きくらいは出来るわけで。

でもなあ…。

現場調べるのになあ、人いるっばいしなあ。ダメだよなあ。協会に連絡して人払いに立ち入り許可って目立つよなあ、やっぱ。一応、逃亡してるヤツを捜してる追っ手になるわけだし、相手にここまで追いついたってか、オレが来たってバレるもんなあ。

バレたら逃げられるか、奇襲されるか。

……オレだってわかれば、間違いなく後者だろうな。

だから親父がくればよかったんだよ、ちくしょー。めんどくせえなら“北斗”なんか辞めちまえ！ っても、そうもいかないからなあ。それってイコール引退って事だしなあ。親父が引退なんかしたら、オレの学費がっ！！

…って、違うだろ、オレ。落ち着け。ヘンな方向行ってる。まず

はこの状態をどうするか、と。

どうしようもない。うん、どうしようもないわっ！！

「……コンビニいこ」

とりあえず時間を潰して、中の方の人が減った後だな。めんどくせーけど、歩いて行けないなら飛び越えてくしかねえし。

確実に夜じゃねえかよ、夜。大丈夫か、オレ？ どんどこへこむっつーの。

こんな時はアレだな、やっぱアレ。

コンビニで、元気の源、マミーげつと。

とりあえず買い占める。ふっ…大人買い。店員が引いてた気がするが、そこはスルー。

駅前まで戻って、マミーを飲みつつ人間観察に興じる事にした。

「あ」

激しくやる気のない足取りで駅まで戻って来て、駅名を見てから、気付いた。

そついや、現地付いたら電話しろって言われてたんだっけ。

親父のせいですっかり忘れてたぜコノヤロー。ったく、何である写真…っーかいつ撮ったんだっつーの、あんなの。

思い出したらムカついて来た…。くそっ、親父のヤロー。こんな遠くにまで来させといてオレで遊ぶなっ！！

駅の傍にあった電話ボックスに入り、ポケットから財布を取り出して、一枚のカードを取り出して、溜息。

っーか今時テレホンカードなんか使うやついねえっての。

項垂れつつ、受話器を上げてカードを挿入。

自宅の電話番号をプッシュして、呼び出し音に反応が出るのを待つ。

……………ぶるるるるる。

って、何で誰も出ないんですか？

自分で電話しろって言つといて、親父いないんですか？

何だ？ 新手的いじめかコノヤロー。

……………ぶるるるるる。

オレがつるるるるだコノヤロー。何だよっ！ 何が定時連絡だよっ！ 馬鹿にしてんのかっ！

だーもっ、真面目に電話してるオレがバカみたいじゃん。バカだよ、バカ。こんちくしょー。

かちや。

「…親父、覚えてるよ」

って、何そのタイミング!? 思わずトリップしたまま呟いちゃったじゃねえかよ! どうしてくれる!!

「……十郎太?」

優しいな、若い声がオレの名前を名指しするわけで。つまりはアレか? しつかり聞こえてたって事ね。あはははは。よかった、親父じゃなくって。

「兄貴?」

「やっぱり十郎太か。いきなり父さんにそんな事言うの十郎太くらいだからね」

「…いや、わざとじゃないから。こう、ちょっと……自分で電話してるって言うとして、到着時間の予測くらい付くだろうに、電話に全くでないから新手のいじめかと思って、独り言を」

「そっか。無事に着いたんだね?」

「うん。……で、渦中の人は?」

「いないよ」

はい?

何ですと? いないですと? ちょっと待てえええ!!

「1時間くらい前に、召集かかって出かけた筈だよ。今日は帰れないかもってオレのところに連絡来たから」

「そうなんだ…」

「うん。いぢめてるわけじゃないから、そこは安心していいよ」

「忘れたんだな。オレに電話しろって言ったの」

「そうじゃないよ」

何でか苦笑が返る。

「そっぴや、兄貴。今日帰ってくる予定だったっけ？」

「いや？ 本当は直接次の仕事だったんだけど、父さんから連絡があつて。忘れてる事を視野に入れて確率は五分だけど、十郎太から電話があるかもしれないからって言つから。そのために一度帰つて来たんだよ」

「え…そっなの？ わざわざごめん」

「いいんだよ。連絡しろつて言つた父さんが悪いんだから。それにオレは長男だし、そのくらいのフォローしないと。可愛い末っ子のために」

……。何でこの人、平気でこういう事言えるんだろう。誰かが回りで聞いてるわけじゃないのに、すげー恥ずかしいんですけど。

「でも、丁度良かったよ。今帰つて来たところだから」

「そっか」

「玄関開けてたら電話鳴るから、間に合うか心配だったけどね」

「もう2、3秒遅かつたら切つてたかも」

「父さんへのメッセージを残して？」

「だつて言わないと気がすまないじゃんか。つてかさ、普通、留守電とかさ。あるじゃん？ 何でウチつていつまでも黒電話なわけ？」

「んー。電話回線が繋がつてると、その間の狭間という感覚がなくなつてね。家の周りを結界で覆つてても、電話回線繋がつてるとそれが通り道になつちゃうからじゃないかな？ 電話使つて攻撃とか、普通に届くし。留守電なんかにしたら、留守録中、やられ放題になつちゃうから」

「……だからって黒電話はないと思うよ。もう使つてる家、絶対日本でもすげー少数だと思うよ。せめてプッシュホンにしようよ」

「うーん。父さんが死ぬまで無理じゃないかなあ。何しろ、母さんと最初に会話をした電話だし」

え…？ 何それ？ 初耳だ。そんな話聞いた事ない。

「そうなの？」

「……その声の感じだと、知らなかった？」

「うん」

「そっか。しまったなあ……」

「何でしまったんだよっ！ 別にいいじゃんか。だいたい、それ知ってたら電話変えろって言わないよ、オレ」

「うん、まあ、そうだろうけどね。父さんの母さんへの溺愛っぷりは、見てて痛いくらいだから」

「実際痛いんだけどな。主にオレが」

苦笑が返る。つーか苦笑しか出ねえわな。あの親父では。

「まあ、そんなわけだからさ。父さんも、普段は大人でしっかりしてるんだけど、母さんが絡むとどうしようもなくなるから。何ていうのかな、母さんの思い出一人占めたいんだろっね」

どこの甘えん坊な子供ですか……。

「そういうわけだからさ、十郎太も……耐えてあげて」

「すげー嫌」

「いやまあ、気持ちはわからないでもないよ？ 見てる方にもダメ

ージあるからね、あの光景は」

49才にもなる男、しかもデカイつーかいかついおっさんが、

自分の息子に妻の姿を重ねて懐く姿は、確かに気持ち悪い。

一応言っておくが、オレの顔が母さんにそっくりってわけじゃない。顔だけなら他の兄弟のが似てるってか、そっくりなのが一人いるしな。それなのにオレにやたらと固執するのは、頭のせい。まあ、頭つーか髪の毛なんだけど。兄弟の中で、オレだけが母さんと同じ髪。

だからこの髪にほお擦りしたりするんだよ、あの親父は……うわ、寒気がした。

「十郎太？ 大丈夫？ 失神してない？」

「……大丈夫。ちょっと思い出して寒気はしたけど」

「そう、悪かったね。……まあ、そういうわけだから、電話はこの

「まだまだよ」

「使用停止になったらどうするつもりなんだか」

「自分の部屋にでも飾るんじゃないかな？」

「やりそうだな……。」

「それで、十郎太。話が随分と逸れたけど、丁度、到着したところ？」

「え、ああ、うん。じゃないや、一応、着いてから現場見に行ってみただけど」

「うん？」

「立ち入り禁止になっててさ。人も多かったから駅に戻って来て、電話してる」

「なるほど。人払い頼む？」

「いや、目立つからいい。もう1、2時間してから、見に行くつもり」

「……夜になるよ？」

「わかってる。でも、ヘンに目立ちたくないし、人払いなんか頼んだらオレのことバレルじゃん？」

「……どちらにしる、危険なのは変わりないか」

「うん。だから、そこは諦めた。目立って奇襲されるよりいいかなつて。一般人、これ以上巻き込むわけにもいかないだろ？」

「……それは、そうだね」

間を置いて、「はあ」と溜息を一つ。

「十郎太、自分には荷が重いつて思ってるだろ？」

「え……あ、うん」

「それは半分当たってるけど、半分外れ。父さん、十郎太でもやるって思ったから頼んだんだよ」

「そ、かあ？」

「そうだよ。じゃなければ、頼まないよ」

「……自信ないんだけど」

「でも父さんには、自信があつたんだろうね。十郎太ならやれるっ

て。信用されてるんだから、やり遂げないとね」

「……………信用、されてんのかな？ そっちの方が自信ないや」

「してなかったら頼むわけないだろ。一族の恥なのに」

「恥って…。兄貴。何か声のトーン下がってますよ??？」

「半分当たってるって言ったのは、相手がどうしようもなく性悪で卑怯で性格曲がりまくった変態だから」

「うわっ。何か凄い事言ってるっ!？」

何だろ、ここまで妙……………いや、普通だったら妙でもないけど、兄貴がこんな事言うのってすげー妙なんだけど。何かあったのかな…。電話越しに伝わって来る殺気にも似た何か怖くて聞けないけど。

「十郎太は馬鹿正直なくらい素直で真っ直ぐだから」

「なっ! 誰がだっ!!!」

「そういうところが、だよ」

くっ。あつさりと言って「はあ」とか溜息付いてるし!!

「だから、そういうところがオレとしては心配」

ぐっ、そう来たか。

そんな事言われたら何も言い返せないじゃんか!

「まあ、父さんが信用してまかせてるんだから、オレも自分の弟信用しないといけないんだけどね。でもね、やっぱり……………甘やかす気はないけど、可愛い末っ子が心配なんだよ」

……………。いや、だから恥ずかしいからそういう事をさらっと言わないで欲しい。

「十郎太、不安があるようなら、オレから乃木の方へ連絡しようか?」

「え…?」

「流石に管理者には無理だけど、父さんとやり取り合ったるうからでも、跡取くらいなら連絡取れるよ」

「知り合い?」

「前に一緒に仕事したことあるし、そっちにオレ、訓練で何度か行った事あるから。普通に知り合いかな?」

「……………そうなの？」

「そこ歪みが激しいだろ？ ……つと、見てないかな？」

「一応、最初に見たけど……」

「そうか、確認はしたんだな。まあ、そういう状態だから、訓練力  
リキユラムとかも結構組まれたりするんだよ」

死亡しそうなんだけど、それ。どんな訓練か想像つかないから勝  
手な思い込みだが。

「どうする？ ……すぐに連絡すれば、動いてくれると思うけど」

「……………うん、いい」

「いいの？」

「うん。…兄貴が言うように、本当に父さんに信用されてるんだと  
したら、それ、裏切るわけにもいかないし」

「そうか」

ぼつぼつ言ったオレの科白に、兄貴の嬉しそうな声が返った。

「余り無理はするなよ？」

「う、ん……」

「十郎太が“父さん”なんて呼んでるの、聞ける機会って少ないか  
らね」

んなつ！？ クスクス笑いながら何てこと言うんだっ！！

そこはさらつと流しておいて欲しかった…。

「父さん聞いたら喜びそうなのに、本人前にして、絶対言わないか  
ら」

ぐっ。

……………ささやかなオレの抵抗だよ、そこんところは。本当にささやか  
だけど！

「そろそろ度数、危ないかな？」

「……………うん。帰り、連絡できないと思う。多分」

「無事に帰ってくればいいよ。連絡なんかなくたって」

「わかった」

「オレも明後日には帰るから、その時元気な顔を見せるように。命

令ね、これ」

「つて、何で命令!?!」

「次期長としての命令?」

笑いながら何言ってるんですかつ、この兄貴は！ しかも疑問文だつたよ今!!

「十郎太、返事は?」

「……善処する」

「そんな難しい言葉よく知ってたね」

「一応、オレ、受験生だから!」

「そういえばそうだったな。じゃ、帰ってきたら勉強も見てやろう」

はう!?! 余計な事言つたーっ!?!?!

兄貴、頭いいし、勉強の内容とか話してる分にはいいんだけど、

“教える”となると激しく鬼になるんだよ。こええんだよ!

真面目に、親父より怖い。

……こ、断らないと。マジで。

「じゃあな、十郎太。しっかり頑張れよ」

「えっ、あ…待って兄貴。勉強…」どこに行く事になっても楽勝で入れるようしっかり見てやるから安心していいよ」………はい」

ダメだ。もう手遅れ。すでにやる気です、この兄貴。

「頑張る……」

「またな」

「また」

「がちゃん、と電話が切れて。つー、つー、つー……と。」

度数の残りはたったの2。これじゃ本当に帰りの連絡は出来ないな、と。

無事に帰れても、その後に地獄が待っている事を哀しく思いながら受話器を置いた。

### 3 自称占い師

時間を潰す事2時間。空はいい感じに茜色。

オレの心も、沈む夕日と共にどこ沈んでるんだけど。

そろそろ行こうかな、とマミーを一パック飲み干して立ち上がる。

「そこな少年」

例の現場をもう一度見に行つて、人が減つてる事を祈りつつ。つか減つて無くて、もうやるしかねえよなあ…。

「そのメガネかけた少年」

しっかしこの分だと夜だよな。間違いなく。日は確実に沈むだろうなあ、どうしたもんかね。

「そのマミー少年」

「つて、誰がミイラかつ!!」

「あははは。いい反応だねー少年」

思わず反応した先にいたのは、豪快な笑いを展開する女。何一つか、結構美人な筈なのに、全く大人の色気となくなつてガッツに見えるのはオレの気のせいか？

「…初対面のレディに対して失礼だね、少年」

「なっ…何が!?!」

「私に対して失礼な事を考えたね？ 動揺してるのが何よりのしょーこ」

くっ…。この女、何者……………つてか、オレってそんなに顔に出てるんだろーか。

「ああ、まあ、少年はポーカーフフェイスとはほど遠いわね」

「人の思考に突っ込むなよ!」

「あははは。本当にそんな事考えてたのか。素直だねー」

「どつちが失礼なんだよ」

「えー？ 何が？」

何が？ じゃねえ！！ 何だよこの女…。

アレか？ コレが親父の言ってた珍事件とかか？？？

っーかこんな女に構ってる暇ねえっーの。

「じゃあな」

「ちよつと待つてよ。せつかく声かけたのに」

「…何か用かよ？」

「用つてか、単刀直入に言うよ。 少年、死相が出る」

ぐはっ。

何か断言した！！ しかもありえないくらいマジ顔で。

「…何だよそれ。どっちが失礼なんだよ、初対面の人間に。っー

かアンタ何？」

「心が狭いねー少年。そんなんじゃデカイ人間にはなれないよ？

見てわかんない？」

わかつたら聞かねえつての！

「しよーがないね。見ての通りよ、う、ら、な、い、し」

……。

くるりと反転。オレは何も見ていない、何も聞いてない。

「こらこらこらこら。現実逃避はいけないぞー」

ぐはっ、何か肩掴まれた。何コレ、馬鹿力？？？ す、進まん…。

「こら少年。年長者の意見は聞くものだよー？」

「離せよっ！！」

「少年、注目の的だよー」

「誰のせいだ！」

「ま、下校時刻のこの時間、この程度の騒ぎを気にするような愁傷なヤツはこの辺りにはいないけどね」

「何だそれ！」

「それくらい賑やかっつて事よ。っていうか、まー事件があつたせいで、気にする余裕ないつてのがホント」

肩を竦めて苦笑する。っーかこっちが苦笑いだつての！

「でね、少年。死相が出てるんだけど」

「あっさり言うなよ、あっさり！　つーかそんなもん、勝手に占ったって金なんか払わねえからなっ！！」

「誰も金払えなんて言ってるよ。私の言いたいのはその先」

「先？」

「そ。少年の死相、回避する方法があるんだけど、コレでどーお？」

言いながら、3本、指を立ててオレに示した。

につこりと意味ありげな笑みを浮かべて、オレの反応を待ってる感じ。……いや、どうしろと？

「で？　それが何？」

「何だ、少年わかんないのか」

「いや、わかんねえだろ？」

オレの科白に、「はあっ」とこれ見よがしな溜息を吐き出しやがった。喧嘩売ってる？

「……少年、裕福かつ甘やかされて育ったね」

ぼつりと失礼な事を言いやがった。

そりや確かに貧乏じゃないし、甘やかされてる気もするけどさ。裕福な暮らしじゃねえし、痛い目ってか死にかけてた事も数知れずなんだけど……身内のせいってか主に親父のせいで。

「凶星かね、少年？　いかなー。ウチの妹の爪の垢でも煎じて飲んだらいいよ」

「…何で通りすがりのアンタにそんな説教されなきゃなんねえんだよ」

「確かにそれもそーね」

半目で睨んだオレに、やたらあっさりとした頷きが返る。何なんだよコイツ…。

「3万。これで私が死相回避してあげる。どお？」

「いらん」

得意満面な顔に即答。つーか、どこをどーみても、足手まといっ

「つーか。厄介者つーか…。」

「3万で死が回避できるのに？」

「……あのさ、一つ言っただいいかな？」

「何？」

「オレがそんな金持ってると思ってるわけ？」

「子供が死ぬのを防げるなら親が出すでしょ？ その程度」

「……。あっさりど、何なんだこの女。」

「つーかそもそも、そんな金払うくらいなら、オレに言わねえっての。あの親父は。」

「出ない。出さない。ありえない。つーかオレが死ぬって前提かよ」

「死相が出てるもん」

「エライにこやかに言われました…。」

「死相だろ、確定じゃない」

「んじゃ死ぬ」

「何だそりゃ…！」

「とにかくさ、どーお？」

「いらぬ」

「即答か。まだ若いのに命捨てる事ないと思うよー？」

「だから何でオレが死ぬ前提なんだつーの…！」

「落ち着け、少年。つねに平静でいられるようにならないと。まだまだだね」

「だから何がだよつ…！」

「それは、少年が未熟 「大変なんですけどー」

「何がっ!？」

「大変なん 「いや、これ電話」

「はあ!？」

「大変なんですけどー、という声が続く。つーかコレ着信音かよ。大丈夫か、この女。」

「で、少年。考え直さない？」

「直さないし、電話出れば？」

「つれないなー」

なおも、大変なんですけどー、という着信音が続く。つーか誰の声だよ、これ。

上着のポケットから携帯を取り出したのを見て、オレはきびすを返す。まったくいつまでも付き合ってられるかっての。

「って、少年ちよつと待った！」

「いらんいらん、何もいらねえっての！」

「ちっ」

……今、ちっ、って言ったよ、この女。舌打ちしたよ、何なのコイツ。

「あーまあ、しょーがないな。んじゃ、アドバイス 「いらねえ」

…そー言わないで聞きなつて。死を回避するアドバイスあげるから

「だからいらねえって」

しつこい、と思つて睨み付けるのに振り返つてみれば、大変なんですけどー、と鳴り響くつてか言い続ける？ 携帯を左手に、にこやかな笑みを浮かべてる。……アレは絶対何かたくらんでる顔だ。

そーに違いない。これ以上関わらない方が良さそうだ、オレの本能がそう叫んでる。もう絶叫レベルで。

だつて親父と同じニオイがすんだもん。この女……。関わると死ぬような場面じゃなくても死ぬ気がする。

「少年、本気になりな」

「は？」

急にマジ顔になつてそんな事を言いやがった。何だコレ、不意打ちか？ 思わずバカみたいな声上げちまつたじゃねえか。

「本気の本気、もうマジになりな。そーしたら、回避できるよ」

「何だよソレ」

「いいから聞いときなつて。結構当たるつて評判なんだから」

「……金は払わないつて言ったよな？」

「いいよ、別に。そーだね、当たってたらさ、また、何かあったら私んトコきなよ。そしたら、そんな時はお金払ってもらうから」

…なんだそりゃ。

「つて事で、死相の少年。死なないで、次、遠慮なく私に入金しに来なさい」

「それが結局狙いかーっ!？」

「当たり前よ。副業だけど、貴重な収入源なんだから」

「副業かよっ!！」

「そーよ。悪い？」

いや、悪いって言われても。別に悪くはないんだろうけどさ。…

…つて、違うだろ！

何なんだよこの女。何でオレ半目で睨まれてるんだよ。わけわかんないよ。

「ま、とにかく。せつかく言ったんだから聞きなさいよね？ 本気になる事。忘れないよーにね」

へらつとした笑みを浮かべて、大変なんですけどー、を停止させる。じゃなくて電話に出た。

「何ー？」

……声デカイよ。

「え？ 嘘っ、それはヤバイんじゃないの？」

何がだよ。っーかお前の存在の方が絶対ヤバイ。

だいたい占いの方が嘘っっーか、いや、多分、オレに死相が出るのは確かだろうけどさ。この女の占いは当たらないと思う。だって適当さ加減しか伝わってこねえもん。真面目に相手しちゃったオレがバカみたいじゃねえか。

……今更気づいたオレって本当バカだな。

溜息一つ、きびすを返す。

さっさとこの場ってか、この女の視界から消えよう。これ以上、こんなところで時間喰ってる場合じゃねえし。

すたこらと歩き出す。

「あ、ちよつと待つてて。……少年」

スルー。完全にスルー。人ごみにさつさと紛れ込む。

「マミー少年っ！！」

その声を合図に、オレは全力疾走した。

っ！かマジで付き合つてられるかつての！！

その足で例の事件のあつた現場へと行って、確認して。ああ、まあ、人はいたけどもう気にしてる暇なかったし。ちよつと走り抜けただけだから、多分気付かれてない筈。騒ぎにもなつてなかったからな。

その後で、親父の言つてた山とやらへ向かつた。

勿論、ここにいてるって確証は全然なかつただけ。

事件の現場に残つてた気配は綺麗に消えてた。いや、消されてたつて言つた方が正しいかな。これだけの事をやるだけあつて、流石にバカじゃなかつたらしい。まあ、同族の追つ手振り切つて逃げる連中だしな。そのくらい当然か。

それでも、微かに残るモノがある。

オレ達にしか嗅ぎ分けられない、ニオイ。……いや、オレ達つて言つたら語弊があるか。探査を専門にしてるヤツラなら、腕がよければ気付くかもしれない。

一族特有のつてかね、何て言えばいいのかな。犬とかのマーキングに似た感じというか。アレは自分のテリトリーを誇示するためのもんだけど、得物を定めた場合に、似たような事をするから。それが残つてた。ま、周囲に気付かれないようにするから、マーキングみたいにあからさまじゃないんだけどさ。

とにかく、それが、しつかりがつつりと、親父の言つてた山へ続いちゃつてるわけで。

もー勘弁してくれつて泣きたい気分だつただけ。正直。でもわかっちゃつた以上、気付きませんでした、わかりませんでした、みつかりませんでした、つて訳にもいかないから。

それはもう決死の思いで、オレはその山へと足を踏み入れるので

あつた。

辺りは何つーか暗い。

日没まで2時間と読んでいたんだが、実際はもっと早かったらしい。

そつだよなあ、移動してるんだもんな。東に……はあ。

まだ完全に夜つてわけじゃないが……中は完全に真っ暗だろうな

あ。おい。

「どーするよ、コレ……」

あのヘンな女のせいだ。こんちくしょー。

どこかで一泊して、明るくなつてからにするかなあ。

いや、でもなー。コレでまた別に被害者が出るなんて事になつたらなあ……親父の立場が余計悪くなるしなあ。

被害に会う人にも悪いしなあ。

だからと言つて、このまま行つたら、オレ、殺されに行くようなもんだしなあ。

どーする、どうするよ、オレ。

素直に、兄貴に連絡取つてもらえばよかつた。……もう遅いけど。

「……とりあえず、栄養補給」

最後の一本、ママミー。

これが最後の晚餐かもしれないねえなあ……はははは。笑えねえ。

手ごろな木の根元に腰を下ろして、街を眺めるように。

都会の夜は明るいねえ。電気が。

家は山ん中だしつーか、山が家つーか……。山のふもとに学校はあるし、あんまり遠出しなかつたもんなあ。

……つて、アレ？

もしかしなくても、オレ、人生初の長距離移動したんじゃ……？

うわ、気付くの遅っ！！ 実感あまりないけど、そーだよなあ。

西日本から東日本へ。大移動だなあ。いやー遠くまで来たんだな、今更だけど。

そうだよな、遠いんだっけ……骨も拾ってもらえないくらい。  
哀しくなった。

……いかん。マイナス思考しか働かねえ。

えーと何か別の事……そういや、他にも追っ手っていたんだっけ。  
そいつらが拾ってくれるか、骨。って違うだろ！

っーか、そっちのヤツラが、アレだよ。片付けてくれねえかなあ。  
そーしたらオレ、このままUターンでいいんだもんなあ。未熟で経  
験不足なオレを出すなっっー話だよ、そもそも。

だいたい、地理だっさ、そりゃ、逃げてるヤツも詳しくはない  
だろっけど、オレよりは絶対詳しいだろーし。

ダメな要素しか思い付かねえ……。

「雪”。オレ、今度こそ死ぬかも……？」

独り言。答える声は当然なし。

ちなみに“雪”ってのは、オレの……じゃないけど、愛刀の名前。  
オレが付けたわけじゃないからな！そこ間違えるなよ！！

まあ、今までにも何度か、あの親父のせいで死にかけたよ。何度  
か。むしろ何度も。

だけど今回は、一人。完っ全に、オレ一人。保護者なし。

死にかけて済んだのは、保護者同伴だったからであって、今回  
はそれがナイ、と。

こっそり誰かが付いて来てるってのも考えたんだけど、ないみた  
いだし。子供にやらせるには荷が重過ぎるよなー絶対。いくらオレ  
が“雪”を預かってるっつたってさあ。限度があるっつーの。親父に  
信用されてる以前の問題な気がしてきた……。

だいたい……ライオンは子供を千尋の谷へと突き落とし、這い上  
がってきたモノだけを自分の子供として育てる。実際は蹴落とした  
りしないらしいが、オレはする！！……とか。親父の口癖。実際、  
千尋じゃないけど、谷に蹴落とされた。っーか何で蹴る？

もっわけわかんないよ親父。

「死んだら親父を呪ってやるか」

化けて出る、と言わないところがオレ。つーか化けて出たら餌食になるだけで、絶対勝てねーもん。相手はそれで生計成り立たせてるんだからさ。オレの学費とかも。

はあ。

もう溜息しか出ない。もしくは乾いた笑い。はははははって、バカかオレは。

……せめて骨くらいは拾って欲しいところだけど、今更言っても始まらない。そもそも覚悟は出来て……るわけないじゃん。けど、やらないわけにもいかない、と。こんなトコまで来ちゃったし？

「んじゃ、行くかあ」

やる気とか全然ないけど。

やられに行くようなもんだしなあ、やる気を出せって方が無理だよ。こんちくしょー。

くしゃつとマミーのパックを丸めて、ポケットに突っ込む。

死んだら絶対化けて出ると心に決めて。……いや、決めたくないけどさ。念のために。

せめて中学くらいは卒業したかったよなあ。後半年切ってるのに。

それに、今度の冬休み愉しみにしてたのになあ……。

「“雪”が取られるわけにもいかねえし、何とかしねーとなあ」

でも、何とか出来なかつたら、享年15才。……いや、ダメだろ。それは。つーか出来ない確立のが高すぎなんだつーの。

ちくしょー。

がつくりと落とした肩を立たせて、メガネを掛けなおす。

やるしかない、やるしかない、つーかヤレ。成せばなる。

自己暗示をかけつつ、不安をいっばいに背負って、つーか不安しかないけど！ オレはやつと森の中へと、二オイが強く残っている場所へと足を踏み入れた。

もう帰れないかもしれない街を3回くらい振り返る。

情けないのは自分でもわかってる。だからそれが、見納めになら

ないよう、まあ、祈るしかねえんだけど……。

#### 4 捕食する者

だーっ！ もう、いきなりだよっ！！ いーきーなーりーっ！！  
！！

とりあえず、必死に走る。走る。走る。

やったらニオイが強く残ってたから怪しさブンブンだったんだけど、アレだ。今更だけど……コレ罠ーっ！！

10歩も進まないうちに銀の刃が飛んで来た。

で、以後、ずっとそれを交わしながら森の奥へ奥へと進んでるわけ。……絶対誘導されてるよな、コレ。

「……つぶね」

木の根っこに躓いて転びそうになったところに銀の刃が飛んで来る。慌てて、袋に入ってたままの“雪”で弾いて、反転。

続けて飛んで来る刃を避けて飛び上がると、再び走り出す。

やばい、本気でヤバイ。相手の確認をする余裕がないっ！ ……  
情けねええ。

オレの標的になってるヤツだったらいいけど、全く関係ないヤツだったらオレは即死決定だよ。ちくしょー。

「……こつちが疲れて止まるの待つ気……じゃないよな。誘導されてるくせえ」

逃亡者は全部で4人。追っ手は何人かいた筈だけれど、現時点で動いているのはガチンコ用のオレを含めた、同数の4人。あんな目立つ事があったから、一族からの4人の追っ手しかいない筈。

一応、その4人の中で一番弱いヤツがオレの標的だし。

今攻撃して来てるのがソイツである事を、本気で願う。つか違ってたなら恨む。何を？ って聞かれたら困るけど、とりあえず、親父かなあ？

「……つて、球っ！？」

細身で30センチほどの長さしかなかった銀の刃の雨が、直径3

0センチほどの球体へと変化した。

慌てて木に飛び移り　　って、直撃コースっ！？　同時に飛び乗った枝目掛けて球が飛んできたわけで。

「っだあっ！」

ぎりぎりで回避する…っつか、まあ、落ちた。普通に。完全にこっちの動き読まれてるよ、コンチクショ〜。

一回転して、地面に着地。流星にへばって間抜けに落ちるわけにはいかない。

だが、ぴたり、と攻撃が止んだ。

「やっぱ、誘導だったんだな」

直感でそう感じたのは、嫌にニオイが残っていたから。強く、強く。その場所が自分のテリトリーであると、告げるためにわざと残したんだろう。

他人の土地にマーキングってバカだよな、と思う。しかもここは、乃木の管理地。ど真ん中より外れてるとはいえ、あれだけの結界を作れる人間がいるんだから、こんなところに自分のテリトリー広げてたら、ここを基点に結界張られてまごついてる間に討伐隊………もとい、オレ達が失敗すれば、管理者自身が出てくるだろうし。

どんなヤツかは知らないけれど、親父と同じくらい強いヤツだ。何しろ“北斗”以外のSSクラス。

国内にたった3人しかいない、退魔師協会認定のSSクラス。世界を見ても10人しかいない、それ。反則なくらい強いに違いない。今もどこかで見てるんだろう、こちらの様子ってのを。くそっ、最悪だ。

「……………はあ」

余計な事を考えていたのに、攻撃はない。つまり、そこにオレが立ち入るのを待ってるって事だ。

今もどこかで見てるんだろう、こちらの様子ってのを。くそっ、最悪だ。

……………でも、悪態付いても始まんねえし、ここまで来ちゃった以上諦めてやるしかない……………よな、やっぱ。

はあああつと息を吐き出しながら、ゆっくりと立ち上がる。

落ちた木を背に、前方に広がるのは森の中にぼつかりと開いた空間。直径で3、40メートルくらい多分ある、広いその場所。

ここなら、翩り殺すつてのがやりやすいだろう。障害がない分、動きがオレよりいいと自負してるんだろうし。

一歩、踏み出す。

どこから来る？ 四方に神経を集中させながら

「ガキが来るとはオレ達もナメられたもんだな」

声は、上空を流れるように届き、地に降り立つ。やたら堂々と姿を見せたのは、その場の中央……何てーか、真正面。

「ガキで悪かったな」

ナメてんのはそつちだろ。気持ちはわかるがなっ！

睨む。とりあえず顔を確認、間違いない。オレが言われた相手だ。違うヤツじゃなくてよかった。

内心安堵の息を吐き出すオレを見据えて、黒い双眸を細める。

「…はん。どこかで見た面だが……？」

「他人の空似だろ。初対面だ」

「そーかい」

クスクスと口元を歪めた笑みを零す。

じっと睨んだまま、もう1歩、踏み出した。こちらの間合いまでは、まだ遠い。“雪”を行き成りさらすわけにはいかないし、あちらがどのくらいの動きをするのか確認しなければならぬ。

オレにも追えるレベルの筈だ、でなければ親父は言わないだろうし……こちらの手にあるのが“雪”だと気付かれないければ、勝機はある。

ありがたい事にオレが誰だかわかってねえみたいだし、ナメててくれてるし。

「んーじゃ、お手並み拝見と行こうかねえ？」

ぐるりと一回転し、地を蹴った。

「愉しませてくれよなあ」

勝手な事をつ！ 半身になって突撃をかわし、3回転。立ち上がり、「雪」を持つ右手を腰に、左手を前に構える。

「一つ目はクリアってかー」  
オレを品定めするように細めた双眸で笑う。気合いで負けてたまるか、メガネごしに睨む。

「つかね……………やばいつす、速いんですけど。」

真面目に、これ以上スピード上げられたら避けられる自信がかなり……………ない。

“雪”を握る手に自然と力が入る。

「ガキ、その手のモノは飾りかあ？ なあんで袋入ったまんまなんだよ、抜かねえのか？」

「……………コレが気になるのか？」

「わざわざ持つてきてるんだ、いいモノなんだろうなあ。さぞかし？」

そりゃ、“雪”ですから。言えないがなっ！！

「悪いが、そう簡単に、期待には答えられない」

「そーかい」

クスクス笑いながら、ぶんつ、と右手を一振り。

「…ま、出し惜しみしてて死んだら、いー笑いもんだと思うがねえ？」

その手の爪が鋭く尖って伸びていた。……………何だよ、そのままでも使えんのかよ。

「さーて、どこまで持つかなあ？」

言いながら、今度は右手を一振り。同じように、爪が鋭くなつて、カチカチと合わせる。

……………気持ち悪い。まだ特に何かをしてるって訳じゃねえのに、嫌悪感しかわかねえ……………何でだ？

細めた双眸で、愉しそうに口元を歪め、突っ込んでくる。

「…ちっ」

袋に入ったまま、“雪”でなぎ払う。……………て、払えねえええ！？

「よく止めたなあ」

愉しそつに、一言。ペロりと舌なめずりをして。

……くそつ。止めたくて止めたんじゃねえっつーの。なぎ払うつもりだったんだってーの！

両手にがっしりと“雪”が挟まってる……じゃなくて、掴まれている、か？ この場合。

「……どこかで見た顔だな」

上から目線で、ぼつりと呟いた。身長差があるから實際上から睨まれてるわけだが。

「他人の空似だろ。初対面だつてさつきも言った筈だ」  
負けじと睨み付ける。

これは、何っーか非常にヤバイ状況のような気がする。

「どこだったか…」

聞けよ！

つーかマジで、オレとは初対面だつっーの！！

……まあ、ウチの家族、全然似てないってわけじゃな……いや、一部いるけど、オレはそうじゃないから、この近距離でいつまでも顔付き合わせると、気付かれないとも限らない。そうなると、虎の子の“雪”にも気付かれるわけで。

マズイよな……。

「……谷口慧斗<sup>ちやぐち けいと</sup>。何で、こんな真似をした？」

とりあえず、聞いてみる。

つーか他のことで気を散らして貰わねえと……。がっしり掴まれて、こつちの力じゃ、どうにもこつちにも動きそうにないっつーか、引いたら、あの両手の爪で切り裂かれるだろうし。

「年上を呼び捨てか」

ギリッ、と両手に力が込められたのが“雪”を通して伝わる。こつちも両手で“雪”を掴んで踏ん張ってるだけに、どうしたもんかなー……。しかもこつちは、抜きやすいようにつて右手で持ってただけに、支点がずれてるからなコンチクショー。

「犯罪者に敬意を払えとは教えられてないから」

「はははっ、愉快だな。犯罪者か」

「違うつてのかよ、あんな真似しといて」

オレの科白に、薄っすらと双眸を細めた。

「本能に従ったまでだ」

っ！！

コイツ、きつぱり、はつきり断言しやがった。

「我々は喰らう側、人間を喰って何が悪い？」

……………ダメだ。

コイツとは、絶対、相容れない。根本的に、違つ。

「元より、我らとて互いに喰らい合っていただろうが」

「……………それ、何百年って昔の話だろ。今は、違つ！！」

右足を半歩踏み出して踏ん張り、腰を落とすようにしながら左に捻つて、谷口の驚いたような顔が視界の隅に映ったが、そのまま勢い付けて“雪”を振り上げた。

びりりりっ、袋の破れる音と、“雪”の振りに合わせて弾き飛ばされる、谷口。

「人間に混じつて、人間として暮らしてるヤツだつて大勢いるんだ。人間に混じる以上、そのルールを守るべきだろ」

数メートルの間を置いて、何ともなしに着地する姿を睨み付ける。

「一族が1つにまとまって以来、定められた掟、お前はソレを破つてるんだよっ！！ 2つもな！！」

今度は、こちらから仕掛ける。言いながら地を蹴つて、一直線に谷口へと向かう。

現状でケリを付けないと、マズイ。

「はっ。それが甘いんだよ」

嘲笑うかのような声を上げて飛び上がり、両手の爪で攻撃をしかけてくる。

「生き残るためには当然だろうっ！！」

“雪”で間合いを計るようになぎ払い、それでもなお突き刺してくる爪を交わして、蹴り上げる。……って、まあ、あっさり交わされるたが。

「一族内でバカみたいに同士討ちやってたから減ってたんだよ。種類とか属性が違ったって、同じ一族には変わりねえのに！」

「甘いな。やっぱガキだな、わかってねえ」

「うっせえ！ ガキは余計…つぶねー」

「よく交わしたな。……踊ってみるか？」

後方に大きく跳んで、距離を10メートル以上おく。

薄い笑みを口元に浮かべ、両手を腰あたりで広げる。その周囲に、ねっとりとした嫌な空気が集まっていくのがわかった。……いや、

まあ、あくまでもオレにはそう感じられただけで、実際は、単に“力”を集約させてるだけなんだろうけど。

「“力”ある者が上に立つ、“力”のねえ者は、何されても文句は言えねんだよ。それこそが、自然の掟ってヤツだ。オレ達が最優先して守るべきは、そちらだと思いがねえ？」

ふわり、と谷口の周囲……両手を基点にして、か？ 銀色の光る球体が現れる。

1つ、2つ、3つ、4つ、5つ、6つ、7つ、8つ、この……

……って、多いわっ！！

「お前と一緒にするな！」

ぎりつと“雪”を握り締める。

マズイ……。

これを一度に放たれたら、避ける余裕がない。つーか避けきれない自信が全くない！

「否定するなら、止めてみる」

歪んだ口元でそう告げて、両手をオレに向けて振り上げる。

全部かよっ！！ 一気に銀色の球体がオレへ向かって来た。

「……つくしよー……！」

袋の上から“雪”の柄を掴み布越しに“力”を通し、目前まで迫

った球体へ向けて、右手の力を抜いて一気に振り抜く。“雪”を預かっている以上、オレだって居合抜きくらい使えるんだよ。……へっぽこだけど！

眼前まで迫った球体は、振り抜いた“雪”によって四散する。

「な、に…？」

谷口の驚いた声も当然だ、きつとオレにそんな真似できるとは思っただけでなかつたろうし。けど、全然喜べねえ。せつかくの隠し玉を披露しちまったんだからな。

姿を隠していた“雪”は、その柄の部分と一部を残して布が消し飛んでいる。無理もないが。だからと言って、刀身が見えているわけではない。そこに見えるのは、白い鞘。

谷口の視線は、当然のようにオレ……じゃなくて、オレの手の内にあるモノに集中してるわけで。やっちまいましたよコンチクショ

「……お前、どこかで見た顔だと思ったが…、そういう事か。」

白い鞘は“雪”だったな。一族の宝刀“雪月花”の一振り」

やっぱりか、バレちまいましたよ……。

この後の展開はもう予想が付いたし、当然のように谷口はそう行動するだろう。内心絶望で一杯になりながら、“雪”を振って鞘を右手で握り直す。

「だから何だよ」

「追っ手の割に、本気で来ないから可笑しいと思っただけなんだが…。無理もないな。長の末子、“なりそこない”か」

「っ！」

唇を噛み締める。“雪”を握る両手にも当然のように力が籠った。

なりそこない 幼い頃に影で散々言われてたのを知ってる。

今はもうオレの耳に入るようなところで口にするヤツはいないが、それでもそう言われ続けているのは、わかっていた筈だった。

なのに、あらためて面と向かって言われて、悔しさだけが込み上

げる。

誰も好きで、こう生まれてきたわけじゃないのに。

……母さんが悪いわけでもないのに。

「一族最強の、長の血。はははっ、あれは美味かった」

「……お前、何言ってる」「三知、だったか。“月”の持ち主は」……

……持ち主は親父だよ。オレ達は借りてるだけだ」

「……ああ、そうか。そうだったな」

クスクスと愉しそうな笑い声を上げながら。

「去り際に一撃、ま、掠っただけだがなあ……オレの爪に引っかかったヤツの血は美味かったぞ。その前に喰ったヤツなぞ、足元にも及ばないくらいにな」

「……っ、お前!!」

「まだガキで、なりそこないとは言え、お前もさぞかし美味いんだろうな。追っ手なんぞ、殺すだけでいいと思っていたが、気が変わった。お前は喰う事にしよう」

そんな事を歪んだ口元で告げて、舌なめずりを1つ。

……悪寒が走った。

ヤバイ、コイツ気持ち悪い。親父とは別の意味で、比べ物にならないくらいキモイ。

「その血肉、しっかりとオレの“力”にしてくれる。なりそこないのお前には宝の持ち腐れだろうからな、オレが有効活用してやるよ。感謝しな」

「ふ、ふざけんなっ！ 誰がてめえなんかに喰われてやるか!!」

「お前を喰えば、三知にも勝てる“力”が手に入りそうだ。ははっ、三知は喰いがいがあるからな。長の娘とは思えんくらい、見た目がいい」

………は？

全身に走っていた悪寒が、一気に消えた。

何っ！か、アレだ。無理もない話だが、いや、気持ちは果てしなくわかるが……思わず笑いが漏れた。

「気が触れたか？ まあ、その方が喰い易いが」

「気付いてねえ。コイツ、バカだ。キモイ上にバカだ。」

「バカじゃねえ？」

それが、相手を挑発する科白以外何でもないとわかっていても、口にせずにはいられなかった。

ひくりと谷口の笑みが凍る。

「お前、本物のバカだな。オレをどーのと言う前に、何だ、お前なんか、ウチの一族にいらないうてか、その資格すらないね」

「血を撒き散らさないよう縊り殺そうかと思ったが、そんなに鬨り殺しにされたいのか？」

「何だよ、本当の事だろ。何を勘違いしてんのか知らねえけどさ、いや、……気持ちわからねえでもないよ？ けど、笑わずにいられねえだろ」

「何が可笑しい！」

「あー所詮、三下ってヤツだな。可哀想に……。 本条三知は、男だよ」

オレの科白に、場が凍り付いた。

あからさまに動揺っつーか困惑した顔になってる谷口。無理もない。

心の底から同情する、この件に関してだけは。

本条三知 三知には、見た目はかなりの美人だった母さんに瓜二つな、オレの兄。言葉遣いは丁寧で自分の事を私と言うし、ストレートの髪を腰まで伸ばしてる上に顔は文句なしの女顔だし、躰の線も細い。身長は170超えてるけど、声が男にしては高いというか、ハスキーなせいか、長身のすらっとした綺麗な女性によく間違えられる。街を歩けば知らない男にナンパされる。……ナンパ男は容赦なく殴り倒している事も付け加えておく。いらないけど。

だがしかし、どこをどう見ても女だが、しっかりばっちり男なのだ。

「それから、長の子供は息子ばかりが10人ってバカみたいな話、

一族内じゃ結構有名だと思ってたんだけどな。それを知らないついでに時点で、終わってなくね？」

「……バカな、アレのどこが「信じられなくても、事実だから。三知には、男」

2度繰り返し返したオレに、谷口が完全に固まった。

漫画とかなら「ひゆるるるる」って風が吹きそつな雰囲気が出た。

緊張感がまるでなくなったこの状況に、オレは感謝しつつ“雪”を握りなおした。

仕切り直しだ、ちよつと卑怯な気もするが、これを利用しない手はない。

三知にい、さんきゅー！！

谷口の硬直をよそに、オレは“雪”に“力”を込め始めた。

間合いに入るまで、6歩……。

一撃、それで決めなければならぬ。確実に当たるためには一気に間合いを詰め、その際のインパクトを最大限にするための“力”が必要だ。

それを成しえるために、この状況を利用しない手はない。

チャンスは一度。これを逃せば、次はないだろう。

谷口の様子を慎重に観察しながら、居合の構えを取り、ゆっくりと躰を鎮めて行った。

## 5 ケモノの子

一線。

それは、全身全霊をかけた、全ての命運をかける一撃。

全力を預けて伝家の宝刀“雪”による居合い抜き。

谷口の立ち位置はしっかり間合い　　というか、クリティカル  
ヒットが可能だった。

「軽い……」

筈、なのに。

唇をかみ締めて、形だけは“雪”を構える。見据えるは前方、全身を覆っていた見事な銀色の体毛を己の流した血で赤く汚してはいるが、しっかりとその両足で立っている姿。

くっそ、アリエネエ……。

呼吸が乱れて大きく肩を上下に揺らす。激しい動きをしたわけじゃない、ほとんど空っぽになる勢いで“魔力”を込めて“雪”を使った反動だ。元々、“握る”事のできる状態で、かつ全力を出せるようにと、遠き先祖が作りし一族の守り刀。

オレの全力でも、全然余力があるんだよな……“雪”の方が。

「遅かったってか？　ちくしょう、洒落になんねー……」

睨む先にいるのは、谷口だ。

ただ、人間が見たら絶対信じないだろうなって姿だが。

人としての谷口の面影は今や皆無だ。

生きている事を確かに告げる、僅かに動く肩と胸。だがそのいずれも、今や銀に波打つ毛皮で覆われていた。全身に毛皮を纏い、その耳は三角形にピンと天を射抜こうと立ち、呼吸のために開かれている口はせりでて鋭い牙を覗かせているし、俯き加減の頭だが薄く開かれている鋭い瞳は濃紺。極めつけは、両足の間から見える、尾。

人狼。  
じゅうろう

それが、現在呼ばれている、その存在の一族の総称だ。

海外ではJINRO、酒じゃない。……どうでもいいか。

かつての呼び名はその土地、その国によって区々だったが、各血族が血で血を洗う争いに終止符を打ち、1つに統合された数百年前に、人狼に統一された。

理由はいたって単純だ。

それぞれをまとめあげ、長として君臨した者が、その血族が、自らを人狼と名乗っていたから。ただそれだけだ。尤も、1つに統合したと言っても、各血族によってその能力や特性が違うから、人狼なんたらって個別の種族はあるけどな。

「は、ははっ……」

鋭く伸びた爪をそのままに、体毛で覆われた左手を頬辺りへと当てて、谷口が笑い声を立てる。

くそっ、全然平気そうじゃねーかよ！！

「腐っても、長の血族か……。やってくれる」  
ぺろりと長い舌で口を舐め、

「頭も悪くはないみたいだな。仕損じたのに気付けば、止めを刺しに来ると踏んだが……」

言葉を紡ぎながら、俯き加減だった頭をゆっくりと上げた。

「見抜かれてたか」

愉しげに何言っただっつーの！ こっちは立ってるのがやっとなんだよ！！

有り難いんだが、ムカ付く。買いかぶり過ぎだっつーの、こんちくしょー。

「で？ そのままでいいのか、なりそこない」

悠然と、ぱつと見ぼろぼろの谷口は激しく上から目線でそんな科白を口にした。

「お前なん「なりそこないには、無理か」

っ！！

自然と、拳に力が入る。

「なるほどな。だからこそその、呼び名」

睨むオレに返るのは、歪んだ相貌。愉しげに、卑下するよつに

「……うるせえよ」

「一族の誉れ高き、長の血族。歴代の長の中でもトップを争うと言われている、今代の長。その末子 「うるせえ、黙れよ」 ……哀しき、されど忌まわしき、混血の血ってか？」

っ、コイツ!!

「もう一度聞ぐが、なりそこない」

「黙れよ……」

「そのままでもいいのか？」

「黙れってんだよ!!」

好きでこう生まれたわけじゃない。

「何も知らないくせに、エラそうに言ってるじゃねーよ!」

「だったら黙らせて見る、なりそこない」

「てめっ…… くっ!？」

言い返す間もなく、谷口が跳躍して鋭く尖った爪を携えた両手を振り下ろして来る。慌てて振り上げた“雪”で受け止めて、いつかの再現。

「よく止めたなあ」

相変わらず上から目線で、“雪”をはさんで対峙する。

「うるせえ」

「さて、どこまで持つかな？」

ぎりぎりと力を入れられて、歯を食いしばって唇かみ締めて、口中に鉄の味が広がって。どこをどうやったって、力負けしてるのはあからさまだ。谷口にはまだまだ余裕がある、少しづつ力を込めて押してきたのがいい証拠。それに比べてオレは限界ギリギリ。

でも、下がれない。

あそこまで言われて下がれるわけないし、大人しくやられるのも駄目だ。

コイツだけは、絶対に

「肝心な事を忘れてんなあ、なりそこない」

嘲笑うように呟いて、鋭い牙を伴うその口をぱっくりと開いた。

「っ！！」

やばっ…。

一瞬、気がそがれて、力任せに“雪”を押し下げられる。肩口を狙って開いた口をぎりぎりでも交わし、“雪”を右から振り上げるように捻って谷口の手を逃れ、そのまま左へと一回転して跳ね起きて

「動きが鈍ったか？」

“雪”を構えるより早く、そんな声と一緒に右脇腹に鈍い痛みが走って、その勢いでふっとんだ。

数メートルを平行移動してから落下、それでも勢いは止まらず坂道を転がり落ちるようにして、

「がっ！？」

強かに背中を樹木に激突させて、止まった。

マ、マミーが……出る。

全身痛いからもうわけわかんなくて、そんな事が脳裏をよぎった。左手には確かに“雪”の感触、離さなかった。偉いオレ。

「寝てる暇はないぞ」

愉しげな声に、頭で理解するよりも先に躰が動く。

上体を起して右膝を立てて、“雪”を斜めに振り抜いて銀の刃を弾いた。次いで、振り下ろし、振り上げて、横に一線。

「さっきのは凡ミスか？ 100点だ」

何故か拍手を貰った。

「うるせえ」

肩で息を付きながら、視線を谷口へと… げ。

思わず顔が歪んだ。

くっそ、眼鏡！ 気持ち悪……。

込み上げて来る嘔吐感を必死に堪える。視界に映るのは、さっき

までとはまるで違う世界だ。

同じ筈なのに、全く違う色を伴ったそれ。感じていた、谷口の臭いテリトリーであるその証、それが今はしっかりと視認できる。

歪んだ、鈍い藍。木も、空も、大地すら、いびつに歪んでみる。

一際、谷口の周囲がヤバイ。怨嗟の念が染み付いて、それを纏っている。睨みたいのに、睨んでたら吐き気が…。

「くそつ、どこに…」

悪態を付く。さつき勢いよく飛んだ上に転がった、確かにそんな目にあつたら眼鏡なんて吹っ飛ぶだろうなあコンチクショウ！。

谷口だけは直視しないように、顔を向けつつも視線は地の上を張った。

アレがないと、戦えない。

くそ、情けねえ…。けど、体感だけでも悪いつつーのに、それを目で捕らえたらもつと洒落になんねえ。ただでさえ、状況最悪なのに、肌で感じるモノに上乘せして、それ以上のモノを視覚が伝えてくるから。

「次は倍だ」

オレの様子なんか気にするでもなく、ゆっくりと歩み寄りながら両手を広げる。

5の刃の倍は10、……っーかそれどころじゃねえんだよ、こつちは!!!

「行くぞ」

くそつ！

左に、右に、弾きながら立ち上がり、最後の一本を避けて、谷口の、足元……より手前を睨む。

本人直視は出来ねえ……って、眼鏡!?

探し物は探してる時は見つからないってヤツか？ ちくしょう。オレと谷口の間回り……いやまあ、谷口よりだけど。そんなところに落ちてやがるよ。更に状況悪化。

壊れてない事を説に祈る。

……っーか、あれか？　これは仕掛けるしかないってヤツか？  
あのまま進まれたら、谷口の背後に回る形になる。その方が楽に  
拾えるような気はするが、気付かれないとも限らない。アレがただ  
の眼鏡じゃないって気付かれたら、壊されないと限らない。そう  
なったら、オレ、終わり。

いやまあ、すでに終わってる気もしないでもないが…。

「楽しいか？」

乾いた笑いを浮かべていたオレに、そんな声。

「お前は愉しいんだろうな」

「そうだな。しぶといからなお前、それになりそこないでも長の子  
供。狩りがいはある」

「狩り、か」

呼吸を整える。

まだ、動ける。大丈夫。まだ、やれる事は残ってる。

“雪”を握る左手を差し出すようにして正面に構え、右手を口元  
へと運ぶ。

「オレは、高いぜ？」

人差し指と親指を噛み切って、唇に付いた血を舌で拭う。

右手を柄へと当て、神経を集中させる。血を流す2本の指で柄に  
輪を描き、鞞側の鏝の上下に添える。

「抜けるのか？」

「出来なかつたら、預かつてない」

ただ問題は、オレの方が空っぽに近いって事。それでも、やり方  
がないわけじゃない。“雪”は担い手の“力”を吸って、その威  
力を示すモノ。

本来は、ソレに触れるモノ全ての“力”を吸い尽くし、己の力を  
発動させるモノ。

制御する“力”が足りないならば、他で補えばいいだけの話。自  
身の持つ“力”以上を望むなら、それ以上に高純度なモノを“喰わ  
せれば”いいだけ。

だから、親父はオレに預けてくれた。

このままでも、己を示せるように。何と言われようと、確かに、血族の者である証として。

“雪月花”が喰らうは、“力”。

従う事を示すは、作り主より続く血統。持ち主が常に血族の長であるのは、血を持ってその封を解く事が出来るから。そして。

最大限にその“力”を示すには、絶対高純度の“力”

“魂”を喰らいて、“雪月花”は尤も輝く。

「“雪”、持って行け」

オレの呟きに、谷口の気配が変わる。

ゆっくりと右手で鞘の上をなぞり、その動きにあわせて“雪”が色を変えていく。

白い鞘は、紅の刀身へ。

血のように赤い、紅い、半透明な刃。

……いつ見てもコレは綺麗だよなあ。

いろんなモノを喰らって、時にその命すら奪って行くというのに。

切先までその色を変えさせて、“雪”が露になる。

「2ラウンド目」

呟く。

出来ればコレを最終ラウンドにしたい、ウィナーは勿論オレで。

「なるほど。禍々しくも美しい…か」

感嘆した声が聞こえた。

「欲しいって言われてもくれねーよ？」

「扱える血統ではないからな」

そう言ってからクスクス笑い始める。

「ああ、だが、お前を喰らえばそれも可能か」

風が鳴った。

迫る銀の刃を弾き、“雪”を構えて地を蹴る。右手は添えるだけ

にし、続く銀刃を叩き落とし、走る。

走る。

眼鏡に向かって！！ …… な、情けなっ。

「…って、待っ！？」

谷口も向かってきた。眼鏡を軽やかにスルー…… じゃなくて飛び越えて。

ちーん。

「ふざけんなーっ！！」

渾身の力で振り切りながら右側に跳ね飛んで谷口の側を抜ける。手ごたえあり。

軽かつたけど！！

「いい切れ味だ。意味はないが」

その声に気持ち悪いとか何とか言ってる余裕もなく反転し、構える。

我慢。我慢だ。後方5メートル、そこに眼鏡がある。それだけで到達出来るから。

谷口は半身になって、じっと自分の左手を眺めている。長く伸びていた筈の爪は、4本、極端に短くなっている。

…… 爪かよ！！

「爪じゃ、確かに意味ないな…」

ちくしよう、思わず同意しちゃまった。せめて腕の1本くらいくれてもいいじゃねーかよ。

つまりなげにブンっと左手を振ると再び元の長さに戻った爪を力チカチ言わせて、完全に向き直る。

「宝刀と呼ばれるモノが、その程度の筈はないだろう？ 当然」

「たりめーだ」

ただ、扱うオレの方に問題があるけどなっ！！

正面に構え、じりじりと後退する。空気を持って体に伝うそれが、目で持って更なる嫌悪を呼ぶ。

…… マジでヤバイ。

飛んで来た銀の刃を弾き、“雪”を横に掲げる。

「あぶねっ」

「後3センチってか」

“雪”で阻んでは言え、目の前でカチカチ鳴る爪先は気分のいいもんじゃない。先端恐怖症じゃなくてよかった…。

じゃねえ！！

「力勝負に部がないってのはわかったかと思ってたが」

「十分わかってんだよ！！」

“雪”を捻りながら蹴り上げるが肘で止められる、左手を返して爪を防ぎ、もう1度蹴りを入れる。

ただし今度は、後方へ跳ぶための踏み台にするため。

「遅い」

ちっ！？

落下点、谷口の手が見えた。もう刃物を手につて次元じゃないよ、手が刃物だよ。ういず刃物。

地に足を付いてすぐに後退、ギリギリで爪先が腹部を掠める。

服だけならセーフだ、セー…ふううう！？

「がふっ」

弧を描いて更に後方へ落下。間抜けにも蹴りをまともにくらった、つーかりーちの差が。経験値の差が！！

「……本当、面白いなあ。やる気があんのかないのかわかんねーな」

蹴り入れたポーズのままですんな事を言う。

うっせ！んなモノあるわけねえええええっ！！！！！！

思ってるだけで、動けないんだけどな。あー…痛え。

かくん、と首を右横に傾け やりい、蹴られ損になんなく

て良かったあ…。ま、かなりダメージ貰ってたけど。苦笑しつつ

右手を伸ばして、眼鏡確保。

「…めんどくせえ」

思わず本音がぼろっと漏れた。

「ははっ、そうか。…安心しろ、すぐに面倒だなどと考えられなくなる」

「じょーだん」

眼鏡を手に上体を起し、しっかりと装着。よし、あちこち痛いが何とかなる。存外丈夫に出来てるからな、この躰。自然治癒能力つてのもあるらしいが、まあ、ケモノつちゃケモノだけに、傷やら怪我なら治りは早い。っーかそうじゃなかったら、とつくに死んでる。谷口云々の前に、親父のせいだ。

谷口を睨み付ける。眼鏡OK！ 壊れてない、流石ばあちゃんお手製っ！！！！

「めんどくせえけど」

内心、微妙な安堵感に包まれながら立ち上がった。

「お前に喰われるのはご免だね」

右手を添えて“雪”を構える。結局、オレにはこの方法で“雪”を使うしかナイし。

姿勢を沈め、うつすらと双眸を細める谷口を正面から見据え、

「お前の血肉になるのも、“雪”を取られんのも」

若干前かがみに構えた谷口へ向かい、地を蹴った。

横に一線、かわされる。左から右へ振り上げ、かわされる。右から左へ振り上げ、かわされる。左から横一線、かわされ……エンドレス。

お互い様だがな。こつちの一撃は触れる事も出来ず、谷口の爪は“雪”で阻む。……………オレの方が不利なんだが、まあ、そこは今更ってヤツだし。

何度目かの攻防の後、3度目の焼き増し。

「力が落ちてきてるな」

上から目線の谷口。余裕ぶっこきやがって、無理もねえけどさ。

「“雪”は疲れるんだよ」

正直な話“魔力”を込めて使うなら、そう躰に影響はない。まあ、負った怪我やら動いた事による疲労感とは別として。ただ今は、“魂

”を込めて、開封中。疲弊の度合いが、通常の5倍増し。多分。  
「お前が未熟なんだろ」

るっせ。最初の一撃がなかったら、それでもねえんだよ。こちとらガンガン死亡ルート一直線なんだっつーの！！

「だからお前の追っ手に選ばれてんだよ」

嘲笑う声。顔も多分嘲笑。実際余裕なんて全然ないけど、そうでもして谷口の余裕顔をどうにかしないと、そうすれば何かの隙も出来るだろうし。オレでもつけ込めるような。

……そこまで躰が持てばイイんだけど。

「お前らの4人の中で、1番下っ端なんだもんな？」

ピシリ、と空気が凍った。

三知にいの時とは別の意味で。谷口の双眸が冷淡な怒りに燃え肉の避ける音と、右腕に鋭い痛みが走った。

「あ、くっ……」

“雪”でなぎ払うも宙を切り、肩膝を付く。

つてえ。直下の怪我はしゃれになんね……。だらんと落ちる右腕に視線を移し、更に顔を歪める。肘下から肩口まで、か。思いつきり裂かれてんね……。はは。

「……つてえ、ナメんなー！！」

“雪”を左へ走らせ、谷口の爪を弾く。くそ、暢気にしてる場合じゃねえ、本気になってる……。

落ちた膝を奮い立たせて、痛みの走る右手を添えて正眼に構えてぞくり、と、今日一番の殺気を感じた。背後から。

「くそっ！」

慌てて振り向きざま“雪”を走らせるが、宙を切り  
「遅い」

冷淡な声がすぐ耳元でした。嘲笑うでもなく、怒りに満ちているでもなく、愉しむでもなく、ただ、事実だけを告げる声。

漫画ならがぶり、実際にはずぶり。右耳に嫌な音が届くけれど、それ以上に右肩に鋭い痛みが走ったのも束の間、激しい熱を帯びる。

右腕と左肩にも同じように痛みは走ったが、喰い付かれた右肩のそれには遠く及ばない。

背後からしつかりと捉えられ、耳障りな音が。

「な、せよ、このやろっ！」

“雪”をくるりと反転させるように逆手に持ち直して、自由に動く左手で後方へと突き刺す。

「それはいらねーよ」

軽口が返ると、“雪”が宙を切るのと、ほぼ同時。くそ、気付かず夢中で喰ってんのかと思ったのに……。反転しながら右肩に手を持っていく、大ダメージどころじゃねえな、コレ……。

「しかし、やはり長の血族か。なりそこないの割りに上等だ、三知よりいい味だしなあ」

両手と口の周りを血で染め上げてそんな事を言う。……全然嬉しくねえ。

「っーか深い、この傷、マジでヤバイ。すぐ治療しないと死ぬね、確実に！ だからと言って」

「血が流れて勿体無い。時間をやるから止血しろ」

酷く冷静にナメくさった科白を吐きやがりました。

「ヤだね」

「ならすぐに意識を飛ばす事だな」

事も無げに言い切って、一瞬で眼前に迫るといい蹴りを飛ばして来る。反応しようと思いが動いた瞬間、右肩に走った激痛が全てを台無しにしてくれた。

まともに右腕……じゃなくて右脇腹、もうどっちでも同じだけど、そりゃもう痛みが走って無防備になった所に綺麗に決まって。オレは躰をくの字にさせて、吹っ飛んだ。

……飛ばされるの何回目だ？

頭の中はやっぱり妙な方へ行っちゃうんだが、そんな事はお構いなしで落下もせず樹木に激突して、落下。

木に寄りかかるようにして、上体が起きた状態で止まったのはい

いんだか悪いんだか、わかんねえし、もう声もでねえし。息も絶え絶え、とは言わねーけど……結構、あの世の入り口が近づいてる感がひしひしと伝わってくる。

谷口がゆっくりとした足取りで近付いて来る気配が伝わって、木に背中を預けるようにして向き直った。

「まだ意識があるのか。…随分と血が流れているように見えるが？」

「てめーで付けといて、何言っただっつーの…」

「口だけは達者だな」

視線がオレからずれて左下へ。

「そんな状況になってもソレを手放さない、か」

「死んでも離す気はねーよ」

「安心しろ。綺麗に喰ってやるから」

馬鹿か！ 何でそんなんで安心出来るってーんだよ、ちくしょー

……。あーも、眩暈がする。悔しいが谷口の言う通り、勢いよく血は出たし、ま、今頭も撃ったしなあ。ここまでか、オレ？ あーごめん、兄貴。勉強無理だった。でもさ、やっぱ、コイツだけは絶対仕留めるから。

谷口が側まで来たら、全てを“雪”に込めて、開放する。

……。この辺り一体吹っ飛ぶだろうが、まあ、こんな時間にこんな山の中歩いてる一般人もいねえだろうし、いいだろ。別に。大事の前の小事ってヤツだ。協会で旨く後始末はするだろーし……。コレ使うハメになるとは思ってたな…。オレがやったら、オレ自身が耐えられないから、まるつきり自爆だし。

ああ、本当、情けねえ……。

近づく谷口を見据えるのもやめて、俯く。今更、しかも一番したくなかった覚悟をするハメになるとはなあ。本当、アリエネエ。

気配だけが伝える、谷口の歩み。

やるなら、1番効果あるゼロ距離だよな。そう思い、躰を少し右に傾けた。これなら左肩に喰らい付こうとかするだろう。“雪”

を掴む手を緩めて、開いた掌にその柄を乗せているだけの状態にする。まあ、握る力がもうほとんど残ってないからだけど。触れてさえ入れれば問題ないし、何よりそれで谷口が油断して近付いてくれるなら恩の字だ。

……………？

その時をシュミレーションしながら待っていたオレは、それに気付くのに少し遅れた。

谷口が足を止めている。

気すらもオレより逸らしてからやっと、訝しむようにして顔を上げた。

「…は？」

谷口は、明後日の方へ頭を向けている。躰はその場に立ち止まったであろう状態のまま。そうして、その顔が、瞳が、愉しげに歪むのを目にして、ゆっくりと同じ方向、左へと顔を巡らした。

「なん、で…？」

思わず驚愕の呟きが漏れる。

それは完全なイレギュラー、ありえない、あつていい筈がない。

谷口のテリトリーであるこの空間の外れに、森から出てきたのであろう、小さな人影が1つ。小学生、もしかしたら低学年かもしれない、まだ幼い子供だ。距離があるし木陰の暗がりにいるから表情は読めないが、躰と顔の向きから察するに、谷口を正面に見据えているんだらう。

多分、驚きと恐怖でソレから目が離せなくなってる。

退魔師協会やら人外の存在なんてのは、表を生きる一般人からすれば夢物語だ。大人でもそれを目にしたら、泣くか、狂うか、逃げ出すか。時々平然としてるヤツもいるけれど、そんなのは極めて稀で　　じゃねえよ！　あんな一般人つてか子供が何でこんな時間に山の中にいんだよ！？　親は何やってんだっ？　だいたい、あんな所にいられたら、使えねえじゃねーか！？

どうする、どうするよ、オレ？　　って、そんなの決ま

つてる！

「お前、逃げろっ！！」

渾身の力で叫んだ。もう痛いとかそういうの言ってらんない、今すぐ逃げろ。すぐに立ち去れ、“雪”の影響の出ない所まで。

「死ぬ気で走」「逃がすわけないだろうが。この時間に小さな子供か、前菜には丁度良い。迷って出た己の不運を嘆くんだな」

前のめりになって叫ぶオレを、無常な谷口の科白が遮る。

「谷口！ お前っ！？」

「なりそこない、お前は後でゆっくり喰ってやる」

一瞬だけ視線をオレに戻して、歪んだ双眸を愉しそうに輝かせて、くつくつと笑った。

## 6 最高消費者

谷口が躰の向きを返る。

木陰の子供に動く気配はない、つーか動けるわけねえよな…。普通に。

「お前っ！ 逃げごふっ…」  
血い出た。

あー人生何度目かわからん吐血、お陰で科白が変に… て、違うだろ、オレ。

口元を拭い、両腕に力を入れて立ち上がるうとして、顔面から倒れ込む。

間抜けだ、この上ないくらい間抜けだ。

だが、谷口は全く気に止めた様子もなく、顔だけ上げてみれば、心底嬉しそうに歪んだ笑みを浮かべてる。一見するとただの嬉しそうな犬面なんだが。まあ、狂犬病の犬がちょっと嬉しそうにしてるって感じた。

……わかんねえか。

「大人しく止血でもしておけ、せつかく美味しいのに勿体無い」

嬉しくもない科白でオレを横目で一瞥、完全に標的はあっちの子供に移ってる。

つーか何で動いてねーんだよ！ あの子供っ！！ さっさと逃げろっての、マジでどっか行けっ… て、おい。

微動だにしなかった小さな姿が、1歩、前へと踏み出す。

何でこっち来んだよ！？ 訳わかんねーよコンチクショー！

「そうだ、逃げ様なんて無駄な事はしなくていい。 いや、逃げ回るのを追いかけるのも一興か」

腐れ外道！ この非人間がっ！！ …て、谷口は人間じゃねーよ。

そもそも同族喰いに人間喰ってるんだから、真っ当な訳ねーよね、

ははは。

…じゃなくて。

笑ってる場合じゃないから、オレ。

ここで余計な犠牲出そうもんなら、オレの夜になっても仕方ないよな決死の突撃がまるで無意味じゃねえか！！

「谷口い！！」

叫びながら“雪”を振り上げるようにして左手を後方へと、それは所謂、槍投げのようなポーズで。

もー自棄です、コンチクショー！

「無駄な事をして勝手に死なれるのは、困る」

「がはっ！」

科白と共に、銀色の球体が飛んできて見事に顔面直撃。

……………カッコ悪い。

「大人しくしてろ、そう時間はかからな…」

軽い痙攣をするオレの耳に届いていた、完全に嘲笑う谷口の科白が途切れる。

今度は何だと思いつつ顔を上げて見たのは、嬉しそうに舌なめずりをする谷口の姿。犬面だけど。

「喰いがいがあるな、ガキなのは残念だが」

それを目にしての正直な感想が谷口の口から漏れて、思わずオレも視線を走らせる。

木陰から進んで月光の元に姿を見せた子供は、一言で現すなら、綺麗だった。

いや、子供だけど！

肩口できちんと切り揃えられた髪は月光を受けて輝く漆黒。何の感情も表さない双眸はアーモンド型の大きな漆黒の瞳。月の光のせいなのか青白く浮き出ているような肌は、太陽の下で目にしても色白なんだろうと思われる。大人になったら男は振り返すにはいられないような美人になる事間違いなしの、造形見事な美少女がそこにいた。

だが、小さい姿そのままに、幼さを十分過ぎるほど残したその表情は、無表情だった。

まるで能面のように。

月明かりの下に佇む姿は、まるで日本人形のように。儚さを感じさせながら、どこか影があるようにも見える。

「10年は経過した後が1番の喰い時か」

下品な笑いをしながらそんな事を言い、谷口は子供へと向かい歩き始めた。

「谷口、止める！」

「餌は黙ってる」

「誰が餌だっ！」

“雪”を地面に突き刺して、それを支えに躰を起こそうと力を入れる。

「お前！ とつとと逃げ……」

睨むようにして子供へと視線を動かして、思わず言葉が途切れた。

全身に悪寒が走る。

嫌な予感がするという次元じゃない、本能が、それに恐怖した。

無表情だったその顔が、目は笑ってないのに、口元だけを歪めるようにして、小さな笑みを浮かべている。

それだけなのに。

出合っではいけない何かに遭遇してしまったような錯覚を感じる。

例えるなら死神とばったり出くわしてしまいましたといったような感覚で。……わかんねーな。オレにもわかんねえ。

1人乾いた笑いを漏らしそうになったが、その少女の笑みを浮かべていた唇が何かを呟いた。

「は……？」

意表を付いたそれに躰がバランスを崩して喰い付かれた右肩から地面に落ちる。その過程で視界の隅に谷口が動いたのが見えて、落

下のインパクト。声にならない叫びを上げてから、右腕を庇うように反転し、……正確にはごろごろと左右に転がりまくったがそれは置いて。左腕に重心を預けて匍匐全身スタイルになってから顔を上げる。

いない。

少女の姿はどこにもなく、オレはゆっくりと視線を右へとずらして行って、谷口を見つけた。

若干前のめりになった変な体制で止まって、やはり少女の姿はなく。更に視線を右へとずらそうとしたところで、ぐらり、と揺らいだかと思うと、どさりと音を立てて谷口が地に横倒しに臥した。

その傍らに、小さな人影が1つ。

「何で…?」

やっぱり無表情で、足元に倒れる谷口を何の感慨もない目で見下ろしているその姿。

何がどうなったのかさっぱりわかんねーが、確かなのは、オレがあんだけ苦労した谷口を、無表情なその少女が何らかの方法で一撃(?)でのしたって事。

「あえりえねー…」

「…ば、かな」

谷口の声が弱々しく響いた。その科白に、オレは激しく谷口に同意したくなる。

「まだ話せるんだ」

可愛らしいのに淡々とした声が続いた。

「おじさん人狼なんだよね？ その割には全然たいした事ないね。三流のくせに私の獲物を横取りするなんて、馬鹿だね」

年に似合わぬ嘲笑う科白が更に続き、谷口が震える。多分怒ってるんだろう。

てか何なんだよ、あの子供…。オレは全然状況が飲み込めなくて、本気で茫然と、2人を見つめる。

「この、ガキ…」

両手を地面に付いて、必死に立ち上がろうとする谷口。力が入らないのか、体を起こす事すら出来ないようで、その瞳が怒りでギラついているのがわかる。

「まだそんなに元気なんだ？ でも無駄だよ」

事も無げに告げて、少女が屈むようにして腰を降ろし、谷口の爪がそれを狙って走る。

「無駄って言ったよね？」

かなりのスピードで振り払われた筈なのに、簡単にその手首を捕らえた。

「人間如きにつ！」

弱っているのに、怒気だけを含んだ叫びを谷口が上げる。それを見下ろすようにして、少女の双眸が薄く細められた。

「誰でも、食べ物の恨みは深いよ。私の食事の邪魔をしたアナタが悪い。痕跡までしっかりと残してあったしね」

「がっ」

びくん、と谷口の全身が一瞬震えて、止まる。

どさりと先ほどよりも小さな音を立てて地に臥した。動く気配はない。

つまらなさそうに谷口の腕を放すと、ゆっくりと立ち上がる。

「やっぱり三流か、人狼なのに。ピンキリって本当なんだ」

そんな科白を吐き出してから、やっと視線をオレに合わせた。茫然としてたオレを品定めするように一瞥してから、谷口を踏み越えるようにしてこちらへと歩み寄って来る。

「おにーさんも、人狼なんだよね？」

谷口を瞬殺したとは思えないほど可愛い声が暢気に尋ねてくる。

「お前、一体…？」

間抜けな事に、そんなお約束の科白が口を付いていた。

それにピタリと足を止めると、軽く眉を顰めてみせる。いや、てーか、そうしたいのはオレの方なだけ？ 特に、その、物凄くうさんくさいモノでも見るかのような視線を真正面からどうどうを

投げて来るそれに対して。

「おにーさんの方が上等そんな匂いなんだけどな  
ぼつり、とそんな科白を口にした。

匂い？

鼻がいいと？ いや、ていうか上等って、オレ、谷口相手にかなり苦戦してたし、さつき殺されかけてただけど？

「お前も、そうなのか？」

訝しむように尋ねる、眉間に皺を寄せまくって。

「違うよ。でもやっぱり、おにーさんは、人狼なんだね」

あつさりと否定し、再び歩き始める。

意図が掴めず、眼前にまで歩み寄った姿を黙って見上げた。

「私が横槍入れたのは、問題になるよね。…でも、見過ごしたり、見逃すのは、無理だったんだよね。私も、命かかっているから」

左手に力を入れて、屈むようにして足を折ると、腹筋に目一杯力を入れて、左腕で支えつつ上体を起こす。

「さっきの、見つけたってのは…」

呟くオレに、無表情だった少女の口元が歪む。

「聞こえたの？ 耳がいいね、おにーさん。結構遠くにいたし、小さい声だったのに」

「何で、谷口が？ お前に、何かしたのか？ いや、そもそもお前

一体何？ どこ…」

「わからない？」

一気に零下まで下がったような声音に、反射的に半身引いて膝立ちになると“雪”を構える。

「直接それを相手にするのはまだ無理かな。 長の血族、その血肉を喰らいて“力”を揮う、一族の宝刀“雪月花”。時に持ち主の命すら奪うモノ。魔刀と呼ばれる所以もよくわかるね」

「お前、何でそんな事知って…」

「おにーさん、それを預かっているからって、本気にならないで殺されかかってたね」

っ!?

ちよつと待て、その科白は可笑しい。

気付かなかつた。全く。見られてる感覚もなかつたし、いや、それどころじゃなかつたつてもあるけど。こういう状況で、他に誰かいたらそれを感じない訳がない。オレも、谷口も。

それなのにずっと見ていたかのような口ぶりだ。

「お前、いつから…?」

「少し前から。おにーさんが、がぶつとやられた辺りかな。気付かなかつた?」

至極あつさりとした答えが返つた。

思わずごくりと生唾を飲み込んで、目の前の少女を凝視する。暢気な科白だが、口調は変わらず単調のまま、顔は無表情で。

「さっきのおじさんはともかく、そっか…。ま、それはおにーさんが未熟者だからつてだけの話だよ」

「つて、何あつさりとヒト馬鹿にしてんだ!!」

「事実だよ。そもそも、本気にならないで殺され様としてる時点で、馬鹿だと思われてもしょうがないよ」

ぐっ…。

何なんですか、この子供つーかガキは!?! 見た目がいいと性格悪いつてのの典型か、こんちくしょー。

「一応、かなり本気で、めちやくちゃマジだったんだけどな?」

「あ、そう」

流した!?

本気でスルーするつもりなのか、顔をオレから逸らして北の空を眺める。

「お前…:…:どんだけ」「ね、おにーさん」

文句を言おうとしたオレの科白を遮つたのは少しだけ愉しそうな響きが交じた声。

「何だよ」

「さっきのおじさんだけど」

「谷口はまだ29才」

思わずどうでもいい突っ込みをしてしまった。

「私から見れば十分おじさんだよ。それで、1つ確認したいんだけど。あのおじさん、仲間とかいたの？」

オレの事は半ば放置気味に科白を続け、最後の問いに思わず硬直する。

「その反応だと、いるんだ」

「…それがどうかしたのか？」

「別に」

北の空を無表情な顔で、何の感情も籠ってない漆黒の双眸が見つめる。

黙りこんで空を眺める姿を、オレも黙り込んで眺めてしまったり。

将来有望なのは容姿だけで中身は極悪とか、このお子様でアレだと、成長したらどんなになるんだっつーの。親泣くなー……いや、親の前ではいいコなのかもしれないな。結構猫を被ったりしてな、馬鹿な男は騙されるんだな、それで。

悪女か……。

何故か、身震いがした。

「3人か」

ぼつり、と声が漏れる。

「何が？」

思わず聞いてみる。

「血の匂いが、3つ。こっちに来るよ。」

「は……？」

「覚えがないから、さっきのおじさんの仲間だと思うな」

「いや、覚えて？ 何で追手がどうかなんてのがわかるん…

何だ？」

「おにーさん、テリトリーが狭いね」

何だよ、このガキはああ……！！

余計なお世話だよ、どうせ鈍いよ、悪かったな。こんちくしょー。

「てか、この感じは…」

「来るよ」

その声とオレが“雪”を構えて立ち上がるのとは、ほとんど同時だった。

後に続くようにして、3つ、影が降り立つ。

長髪のインテリそうなキツネ目男を中央にして、両脇にはガタイのいい筋肉質な大男が2人。つーか、お前等、キャラも見た目もかぶってんぞ。ま、双子だし、しょーがねーか。

「くそっ」

顔を確認して、悪態を付く。

「知ってる人？」

エライ暢気なことを聞いてきた。んな訳ねー。

「こつちが一方的にな」

「“雪月花”か」

長髪キツネ目が品定めするように視線を投げて、

「慧斗は、ガキと侮ってやられたか」

動かなくなつた谷口に横目で一瞥するようにして続けた。

「向こうも知ってるみたいだよ」

左隣から淡々とした声が返る。

いや、てかさ、そこでそういう判断はしないだろ、普通！？

「ガキ2人が追手か。ナメてんのか？」

「美味そうだからアリだろ」

肩を竦める大男2人。いや、お前等脳みそも筋肉？

「慧斗との戦闘で負傷しているな」

1人冷静にキツネ目男。

「だが。“雪月花”を手に行っている以上、全力で潰した方が得策だな。アレは暴走する事もありうる、持ち主に扱いきれず、または、持ち主が意図的に」

「詳しいじゃねーか、きしんきじゅうじつ錐崎竜道。腐っても、分家補佐役ってか？」  
キツネ目、もとい、錐崎は小さく肩を竦めた。

「次期長と仕事をする機会があったものでね。それに興味は尽きない、その特性にも」

「あつそう」

「錐先、オレはあつちのガキの方が。長の息子とかいらねえよ？」

「ロリコン」

「わかってねーな、かきよう佳夾。ガキの方が美味いんだよ。そこに性別は関係ねえ。7、8歳くらいが1番の喰い時なんだよ」

「ロリシヨタか、きょうか夾佳。我が兄ながら、そこは一生理解出来そうにないな。それにオレは20代の方が喰い時だと思いがねえ？」

「うんうんとうなりながら、筋肉たるまは変態筋肉たるまつぷりを発揮している。」

兄は山井夾佳、弟は山井佳夾。

一卵性双子児の双子だが、メモにあった注意事項の変質者ってそういう意味だったのか……今更納得だ。ついでに、オレはどっちからも外れていて、一安心。

じゃ、ねえ!?

思わず視線を左下へと移してみると、無表情だったその顔が、あからさまに不満げな色を浮かべている。つーか目え細め過ぎ。

「2対3か、子供相手に少々大人気ないかな」

「錐崎、でもアイツラ、谷口に2人がかりなんだからアリだろ？」

「子供だからね、彼等」

「それでやられてんだけど、谷口は？」

「慧斗は相手を見た目で判断して、中途半端に手を抜く悪い癖があったからね。油断大敵という言葉は、まさに彼のための言葉だ。補足するなら、後悔先に立たずでもいいね」

緊張感ゼロだなー…。

こっちのガキは、本気でこ機嫌斜めですよって顔してるし。

何だろっ、これ。この状況ってか、この空気。そういう状況じゃ

ないよーな気がするのにはオレだけか？ まあ、お陰で、いい感じに回復出来るけどさ。もちっとこのだらつとした時間があれば、肩の傷は塞がるしなあ。

「あー、んじゃ、アレだ。タイムンならおっけー？」

「“雪月花”って話にしか聞いた事ねーけど、きれーだなあ」

「佳夾、駄目だ。それと、夾佳、あれは、長の血族にしか使えない」

「「えー」」

……えーって。もうおっさんなのに、「えー」はないだろ、「えー」は。確かオレの記憶が正しかったら、こいつらもう40歳とかだった気がするんだが……。ああ、まあ、31歳の錐崎に使われる時点で、お察し下さいか。

小さく深呼吸をして、すり足で半歩全身。

「十郎太君」

えらい人が良さそうに、優しいな笑みを浮かべる錐崎。

オレの本能が察した。こいつ、絶対、性格悪い。

「……何だよ？」

「君が協力してくれるみたいだから、色々と助かるよ。“雪月花”の事も含めて」

にこやかに告げられた、それ。

「逃げろっ！」

“雪”を右に構えて、地を蹴る。

「察しがいいね。流石は戦闘に長けた、長の血族といった所かな？」

右から横槍を入れた佳夾の爪を避けて左腕を掴んで捻って押し下げ、変な音がしたが序に踏みつけて跳躍、振り抜いた“雪”を錐先は変化した爪で受け止める。

「狙いはいいね」

「お前が1番強いからな」

「有り難う。でも、1つ忘れてるよ？」

「何を……」一人で、僕達3人の相手は、流石に欲張り過ぎだと思よ？ それに、我々は喰らう者。ゆえに、追われている」

言われて、ハタと気付く。佳夾は避けて踏みつけた、でも、夾佳は対峙すらしてない。

「いただきます」

お行儀いいと褒めるべきなのか微妙な科白が聞こえ、肩越しに振り返ろうとして、

「余所見する余裕はないと思うよ」

何ら様子の変わらない錐崎の声と、“雪”を握ってる左手側から佳夾が右手を振り上げる。

「くそっ」

せっかく直った右腕が少しばかり挟られるが、その手首を握って直撃はしのぐ。……っか、腕が交差してるし、力入れにくいし、動いたらやられるだろうからヘタに動けない。

「喰いがいねーなあ。余り美味くなさそーだよ、錐崎い」

「長の息子だから、美味しいと思うけどね」

「そっかあ……？」

何でこの状況でこいつら、どんだけ暢気に会話しやがるんだよ！ 佳夾の左腕は暫く使い物にはならないだろうから、その間に何とかしないと。いや、もう終わってる感があるっちゃあるんだが。

あーもう！ だから逃げろって言ったのに！！

「中学生なのに、恐るべきだね。流石は長の息子と言っべきなのかな？」

「それはどーも」

「十郎太君、君は、本気になったら、どれくらいなのかな？」

言いながら、錐崎の輪郭がぼやける。

「こんな事しながら変化出来るなんて、流石は分家補佐役殿だな」

「そーだよ、錐崎はすげえんだよ」

何でかオレの科白に、佳夾が同意して。んなもん、いらねーっつの！

で、当の本人は皮肉を込めたオレに相変わらざるの笑みを浮かべたままだが、“雪”を伝える圧力が強まる。

終ったなあ、とか。今日何度目かの悟りを開く。

どさつと背後でした小さな音が耳に届いた。ああ、やつちまったよ。オレの決死の特攻も無駄に終わりましたっけ。ちくしょー。でも、だ。

巻き添え食ったのは悪いと思うが、自分から首突っ込んだんだし、自業自得って… 本当、悪い。んでも、すぐにオレも行くし、幾らでも苦情は受け付ける。変わりに、コイツラはしっかりと仕留めてくから。

オレの全部を“雪”に食わせる。

さつき谷口にやろうとした自爆技。やらねえで済んだと思ったけど…、はは、やっぱ、甘いんだな、オレ。

この近距離なら、逃げる間すらない筈だ。

「でもさ、錐崎竜道」

全身が銀色の体毛に覆われた、赤い瞳を見つめる。

「全部終るまで、わかんねーよ？ 勝負ってのは」

「君にその覚悟があるとは思えないけどね」

「ま、全然ねーけど。一応、オレも「さつきの科白、あなたに返すね」

はいっ!?!?!

科白を遮って、冷淡に、けれど、どこか愉しげな声が響いた。

「油断大敵」

可憐なその声は、すぐ傍でした。

「なっ…」

錐崎の顔が驚きが変わり、オレの視界から消える。“雪”が持つて行かれそうになるが佳夾を掴んでたから何とか持ちこたえ、

たのも束の間、掴んでいた右手首に一気に体重がかかった。思わず放して半歩下がったオレの目の前を、膝から崩れ落ちていく。

「何で…?」

目を瞬いて、佳夾を見つめる。びっくりとも動く気配がない。

「相手を見た目で判断しないってのはいい事だけど、相手が何なのかもきちんとして見て判断出来ないんじゃない、三流だね」

淡々としたその声。すぐ傍で聞こえる。幻聴じゃないよな、そんなわけないよな。この上から目線の科白。こくりと生唾を飲み込んでゆつくりと視線を左へと。少し上げるようにしながら。

悪魔が悠然と笑みを浮かべていた。

…じゃねえ、違うだろ、オレ。落ち着け。

「お前…」

「おにーさん、私に助けられるの2回目。カツコ悪いね、私より年上なのに」

可愛く微笑んで告げられた科白に、思わず殴りたくなった。

「さて、蹴り飛ばしたおじさんは、このおじさん達よりマシなのかな？」

「蹴ったのか…。視界から一瞬で消えたぞ」

「助走付けてあったし」

「いや、そういう問題じゃ」「ガキが!!」

怒号が轟いた。

フェミニストっていう文字はどっか行ってんな……無理もないか。

思わず溜息を付いた後で、弾かれたように視線を走らせる。銀色の球体が数個、木を背にして立ち上がるうとする錐崎の周囲に漂っていた。徐々に増やしていく数。

「……谷口より多いな」

そう口にしてから、笹の葉のような形状の銀色の刃が混じっているのに気付く。

「同時に使えんのかよ、流石、分家補佐役」

「それってエライ人？」

どうでもいい事を尋ねて来る。

「一応は。人狼の中では結構上」

「あの人強いの？」

「協会はBランク認定してる。つーか谷口とかあの筋肉たるまツインズよりは全然強い」

「ふうん」

“雪”を構える。ちったあ回復してるから、“雪”を使えば相殺出来る筈。何たって、今回の開封は、命かけてんだし。

「餌は黙って喰われてろ！！」  
吠えた。

「三流に命令される謂れはないよ」

こっちは毒を吐いた。

平然とした顔でそんな事を口にした姿を一瞥してから、ハタとする。余所見してる場合じゃねー!？

慌てて視線を錐崎に戻すのと、銀の光が飛んで来ると、同時に

「邪魔だよ」

本気でそう思ってると思えない声で、オレに一瞥してくれてから、前が出る。

邪魔って何だよ！　ってか、危ねーだ…ろ…　はい？

錐崎の狙いはいつの間にか摩り替わっていたのか、光は完全にその少女の方へ向かっていて。いやまあ、気持ちはわからないでもねーけど。

でも。

直撃した筈のそれは、全て、綺麗さっぱり消えていた。

当たると思われたその刹那に、むしろ、当たった後で？

「やっぱり、三流」

短いコメントを残して、うんざりしたように肩で息を付く。

「本当ならアレでよかったのに、余計な事するから後追ってきて、無駄な体力使ってるし。今もそうだし。それなのに、この程度か。

どう考えても採算合わない。偉そうな事言っておいて、全然たいしたことないよ、おじさん」

何事もなかったかのように、毒を吐き続ける。

いや、何ていうか、目の前で起きた事にもびっくりだけど、その激しく上から視線とか、偉そうな事ってお前が1番偉そうなんだけど？

で。少女の向こうで錐崎は赤い眼を限界ギリギリまででっかくしちゃってたりして。無理もない。気持ちにはわかる。

しかし、どーいうからくりなんだ？ 防いだでもなく、弾いたでもなく、消えたって言葉しか合わない。

「面倒だから、さっさと終わりにしようか。門限過ぎてるから、早く帰らないといけないし」

すたすたと、普通に歩いて錐崎へと近付いていく。  
「すげー我儘だな……。」

その背中を眺めて、内心呟いた。

「お前、まさか……。何でこんな所に……？」

驚きだけだった錐崎の目に、声音に、怯えが交じる。

「おじさん、それ、本気で言ってるの？ ここが何処だか知らない筈ないでしょ？」

「馬鹿な、手出しは私、関係者じゃないよ。15才未満の子供なのは、見てわかるよね？ それに、喧嘩を売ったのはおじさん達で、私はただの正当防衛だよ」

怯えきつて後ずさる錐崎の姿に、オレは本気で疑問符が浮かんだ。

錐崎竜道は、退魔師協会でBランクに認定されていて、分家の家長の補佐役を務めてた経験があつて、兄貴達と一緒に仕事をした事もあつて、何より、里を出る時に、谷口と2人がかりだったとはいえ、三知にいを交わして逃げたヤツだ。

そいつが、怯えてる。

「冗談じゃないっ……」

錐崎が、叫びながら反転した。回れ右。……いや、敵に背中を向けちゃ駄目なんじゃないか？ 普通。それもわからないくらい、気

が動転してるって事か？ 走り出そうとして軽くコケる辺りはお約束…じゃなくて、追いかけないと！

「逃がさないよ」

酷く凍り付いた声だった。

後を追おうと地を蹴ったオレの耳に飛び込んで来た声、それに視線を走らせるが、  
いない？

3歩で足を止め、周囲を見回す。

「がっ！」

呻き声が出て、そこを見ると…………… 錐崎が首根っこつかまれて地に突っ伏していた。

掴んでいるのは、能面みたいに無表情になった顔の少女。

「逃がさないって言ったよね」

錐崎は必死にもがいているように見えた。それでも、少女の手が放れる様子がなければ、必死に抑えているという風でもない。だって、片手だ……………。

「馬鹿な、馬鹿な！ こん、な…と、ころ、で…………。 霊ぐ…………」

抵抗が弱まるのと、声が小さくなるのとは同時進行で、それつきり錐崎は動かなくなった。首をねじ切ったとか、締めたわけじゃない。

ただ、抑えてた、それだけで。

「やっぱり、三流」

事も無げな評価だった。

立ち上がり、不服そうに顔を顰めて、オレに向かって歩いて来る。

「 お前、いったい…? 」

いつかの科白をもう一度繰り返したオレに、顔を顰めたまま視線を向けて。

「最高消費者」

短く、そんな科白が返った。

## 7 喰らう者

思わず凝視した。その科白の意味する所は、何だろうと。

「それにしても、本当に大した事なかったね。不味いし」

本気で不服そうに双眸を細めるその姿は、食べたお菓子に不満を言う子供の姿と全く同じだ。

ただ、意味合いが全く違う。

「お前まさか、アイツラを…」

「食べたけど。悪い？」

あっさりと、それを口にした。完全に開き直ってる。

生き物を糧にする種族は数多。

人間も動物を食べるし、時に食べられたりもする。

それでも、一方が一方を喰らい尽くさないよう、その種が他者に喰われて滅ぶ事のないように。退魔師協会によって、そこに明記されている種族は、同じく明記されている種族の命を奪ってまで糧とする事を禁じている。

それをした場合、退魔師協会より処罰対象として命を狙われる。

「元々、退魔師協会から処罰命令が出たし、人を喰ったせいで、人狼一族の掟が優先される事態にはなっただけど」

「お前、協会の関係」「所属できるのは15歳以上だよ」……だよな。でも、お前のした事は…」

「人狼側からクレームが来る？」

「そうじゃなくて、お前…。アイツラは、まだ」「そうだね。生きてたね」

至極、当たり前前のようにそれを呟く。

「退魔師協会は」「知ってる。でもね、私の貴重な食料を残らず食べて、しっかり自分の痕跡残しておいたのが悪いし、後の3人に対しては、完全に正当防衛だよ」

「ごくりと生唾を飲み込む。」

何の感情も込められてない瞳が真っ直ぐにオレを見つめている、口調は年に似合わないほど飄々としていて子供とは思えない。人間のフリをしているだけで、実は違うのかもしれない。長寿の種族なんかでは、子供の姿でも何百歳つてのがいるし。

でも、谷口に対して、自分からすればおじさんだと断言した。それなら、多分に見た目どりの年齢なんだろうが、違和感が有り過ぎる。

わかっていて、どうして谷口を皮切りに、全員を喰った？ 知られば、自分が退魔師協会から討伐対象になるとわかっていて。

「お前も、アイツラと同じ…なのか？」

導き出される結論は1つだけだ。

アイツラと同じように、誰かを喰い、退魔師協会から負われる身なら。更に誰を喰らおうと関係ない。ただ、それでも疑問は残る。

“喰らう”と一言で済ませて、その有り方は様々だ。丸ごとなものいれば、一部だけつてのものもある。有名所だと、血とか、目とか、手とか。

けれど目の前にいる少女は、そのどちらにも該当していないように思えた。

「あんな三流と一緒にしないでくれる？ 失礼だよ。それに…」

本気で不服そうに眉を顰めてそう呟くと、首を傾げるようにして科白を止める。

失礼って…。ルールをやぶって平然と人間のフリしてる方がよっぽど失礼じゃねーかよ！ ってか、そういう意味で言ったんじゃねー！！

「お前、ふざけた事…って、何だ？」

双眸を細めて何か思案するような素振りを見せた姿に思わず問い掛けた。

「おにーさん、本気で言ってるの？」

「何がだっ！」

「おにーさんの方が上等な匂いがするんだよ？」

凄く、美味

しそうな」

絶対零度に下がった声音に、背筋を悪寒が走りぬけた。愉しげに歪む双眸、口元に浮かぶのは小さな笑み。

初めて見た時に感じた、アレだ。

出会ってはいけない、それに触れてはいけない、見てはいけない。

本能が、恐怖する。

知らないうちに“雪”を握る手に力が籠った。

「これって問題だよな。手出し無用なのに、人狼一族じゃない私が手を出した。クレームじゃ済まないかな、流石に」

クスクス笑いながら、ゆっくりと歩み寄る。

“雪”の間合いに入っているが、多分、それには気付いていない。

「でも文句言われる筋合いもないよね。私の邪魔をしたし、正当防衛だし。しかも不味いし。逆に私が文句を言いたいくらい。あれだけ騒いでおきながら、この程度なのってね」

２メートルほどの距離を置いて、少女が立ち止まる。

「おにーさん、それ、使ってもこの距離だと意味ないよ」  
動じた様子もなく告げる。

「威力、知ってて言ってるのか？」

「<sup>たかや</sup>弥さんに、何度か会った事あるよ」  
は…？

その固有名詞に、思わず緊張感がぶつつりと切れた。

「何で兄貴に…」

「ここがどこだか、おにーさん忘れてない？ それと、<sup>まさかす</sup>将和さんはお父さんの友達で、<sup>やよい</sup>弥生さんには、私の都合で隔月ペースで会ってるよ」

「親父の知り合いの娘？ つか、ばあちゃんとも知り合いって…」

マジで何者だよ、お前」

「おにーさん。もしかしなくても、甘やかされて育ってるね」

ぐはっ！

自分より年下のお子様に言われたくねえ！！！！

「話を戻すと、その威力自体は関係ないよ。一弥さんが使っても同じ。空いてると、私に対しては無意味だよ。直接、こない限りはね」

「兄貴が使っても駄目なんじゃ、オレ如きじゃ全然駄目じゃねーか」

「使い手は関係ないよ、その性質に理由があるんだから。 弥

生さんにはお世話になってるし、他の人も知らない訳じゃないけど、お父さんにこれ以上迷惑かけたくないし、仕方ないかな」

「何が…？」

「私が余計な手出しをしたのを知ってるの、おにーさんだけだよ」

「だから？」

「死人に口なしって言うでしょ？」

歪んだ笑みを浮かべた。

「お前っ！！」

「さっきのおじさん達じゃ全然足りなかったけど、おにーさんが美味しいのはわかるし、容量も多い。食欲を凄くそそるよ。それに、お父さんに迷惑かけたくないなら、おにーさんを黙らせるのが1番と言う事で、おにーさん、大人しく食べられて」

「ふっ、ふざけんな！」

「痛くないから大丈夫だよ」

「そういう問題じゃねーっ！！」

叫びながら“雪”を揮った。

谷口に対して使い切った“魔力”は若干回復してるし、錐崎達には使わないで済んでよかった。つーか、何でアイツラいなくなったのに、オレは変わらず命が危機的状况になってんだっての！？ わけわかねーよ、コンチクショー。

「意味ないって言ったのに」

降り抜いて隙のありまくるオレに、そんな声が聞こえて。

視線を動かせば、何事もなかったかのように立ってたりする訳で。

「冗談だろ…？」

「これが現実だよ」

「……そついや、さつき、錐崎の攻撃も…」

消えてた。んでもって平然としてた。……無敵か？ いや、でも、それなら、襲い掛かれても何もする必要はない筈だよな。なのに動いてて、つーか迎撃してた。錐崎だって片手で簡単に押さえつけてたし、どんだけ馬鹿力なのかと…。

………て、あれ？ ちよつと待て。

何だ、何かひつかか… って！ 何か来たーっ！？

「おい！ あぶねーだろ！！」

言いながら“雪”で払って、後方へ跳躍して交わす。伸ばされた右手は宙を切って、愉しげに笑う。

「おにーさん、頭大丈夫？ 私、おにーさんの口封じをしようとしてるんだけど？」

そうでした……。

まるで、肩に付いたゴミとかムシを払うって感じだよ、ちくしよ。つーか、真面目に、アイツラよりコイツのが、思考回路が危険極まりない気がするの。オレの気のせいかな？

普通、そんな理由で世話になってるヤツの孫とか、知人の息子とか、弟とか、命狙わないっつーの！

「怪我はもう綺麗に治ったみたいだね。おにーさんの方が上等だし、ちよつとくらい抵抗しても構わないよ。面白そうだから」

「子供がそんな事言わない！！ 可愛げが全然ないっ！」

「別におにーさんに可愛いと思ってもらわなくて構わないよ」

あつさりと……。

「ただ曲がってんだよ、コイツ…。」

「逃げてもいいよ？ 逃がす気はないけどね」

「オレは、逃げ切る自信が全然ない」

「負けを認める発言だね。おにーさん、ヘタレ？」

「っさいわ！！ こんな知らん土地で、地元のヤツ撒ける訳ねーだろ！！」

「ああ、なるほど。でも、私が追いつけないくらい速度で逃げつづけたら、エネルギー切れで追いかけれなくなるよ」

「そんな少ない可能性…… って、エネルギー切れ？」

「そうだよ。でも、まあ…… 匂いは覚えたし、そうなる前に捕まえる自信はあるけどね。狙った獲物は逃がした事ないよ、一度も」

言いながら、一直線に向かって来るわけで、後方へ飛びつつ逃げるオレ。

…… 情けなっ！ んでも、全然殺気とかねーし、冗談なのか本気なのか微妙…… いや、マジなんだろうけど。多分。

「狙った獲物って、狩猟でも趣味なのかよ。オレよりガキのくせに」

「確かに。おにーさんより年は下だけどね……、こういうのの経験値は間違いなく私の方が上だし、場数も踏んでると思うな」

そういつつ、右に回りこんで蹴り入れてくるのを交わして、“雪”を正面に構えて距離を取る。そこに手刀が飛んできて、“雪”で払おうとすると向こうが避けるし、キリがねー。

「いや、ガキが何言ってるんだか」

軽く笑って余裕たっぷり言い返したが、実際は結構ヤバかったり。

「私、5才の頃から、退魔師協会の仕事を斡旋して貰ってるんだよ」

口もアレだが、手も足も出るし、どういう教育受けてんだよ、このガキっ！！ 口調に反して殆ど無表情だし、それが逆に怖えんだよっ！！ ちっさい分、リーチが短いからそこだけは助かってるけど！

「ったく。2年かそこいらじゃねーか。それにどうせ、保護者同伴だろ」

その科白に物凄く不服そうに眉を顰めて、距離を取ったオレを追わずに立ち止まる。

「小さいのは認めるけど、凄く失礼だね、おにーさん。私、これでも中1なんだけど。それに単独だし」

「はああ！？ 何寝言言つてんだよ！ お前のどこが中1なんだっつーの！！ しかも単独とか有り得ないし！！」

「誕生日はまだ来てないから12才だけど、この山を東に下ったところにある、錫ヶ原学園すずがはらの中等部に在籍してるよ。1年2組」

「聞いてねーっ！！ ってか、幹旋も何も、所属してないヤツに「お父さんにお小遣い稼ぎで分けてもらってるんだよ。1人で行く前は、お小遣いはなかったよ」

「おいおいおいおい。お前のオヤジは何を考えてる！！ オレんとこよりひでえじゃねーか！ 違う意味でっ！！」

「それに、狩猟っていうよりは、食事に出かけてるだけで、別に退魔してるのとも違うんだけどね」

暢気な口調で言いながら、地を蹴る。

「食事い？」

伸ばされた手を交わして、右に飛び退いて、再び距離を保つ。後を追って来るのに対し、「雪」を右手に構えて…… ちよつと、待て。食事？

「そつだよ」

即答し、迫る姿に、一線。居合抜きのみで。

「食べないと、死んじやうでしょ？」

簡単に上へと飛んで避けてから、当然のように科白を続けた。

……避けた。前は動かなかった、でも、今は避けた。って事は、だ……

「そつだな。わかった、やっと」

「何が？」

立ち止まり、オレを眺める姿は、ただの子供だ。どこをどう見ても。いや、やっぱり中1にはどうしても見えないけど！

それでも。つーか、年の話はおいとして。

右手をメガネに伸ばす。……真面目に、すげー確認するの嫌なんだけど。多分に、オレの予測が当たってれば、つーか、絶対そうだと思うんだけど……。

「メガネ、壊れたの？」

「いんや。これ、ばあちゃんお手製だし、そう簡単に壊れないから」

言いながらメガネを外して、  
自分の存在が抹消される未来を再確認した。

そこにいたのは、先ほどとは全くの別人だ。顔は同じだけど。まとう気配も別物だ、メガネがないとよくわかる。直に見えるから。隠してても、化けてても、間近で見れば、わかる。

漆黒の髪と眼は、その色を変えていた。

白髪、紅眼。

雪のように白い髪と、血のように紅い眼。

「 “ 霊喰い ” 」

呟く。

「非似の色合いはあるが……。そこまで交じりつけないのが現す存在は、1つだもんな」

心底納得したオレの科白に、拍手が返った。

「見えるんだ？ やっぱり、おにーさんの方が上等だね」

「乃木月乃のきのつきだな？ 現存する、最後の“ 霊喰い ” 」

「そう、正解。名前まで知ってるなんて、やっぱり弥生さんの孫だね」

「ああ。ばあちゃんに聞いた事あったし。過去に例を見ない

ほど、強いつてな」

「お陰で、日常生活に支障をきたしてるよ」

「そうは見えないが」

「動くのはね。でも、足りないんだよ、全然。普通の人間を生活をするのにね。満腹感とか味わった事ないし、へたに動くと、すぐに

エネルギー切れちゃうんだよね。そのまま食べられないと、死ぬし。やせ細って、弱って、餓死する訳じゃない。残量がゼロになったら餓死なんて、滑稽だね」

1歩、踏み出す。

「“霊”を喰らう事で躰を維持する、“霊喰い”。霊体だけでなく、霊的エネルギー、はてには、生きてるヤツの魂すら喰らう者。それゆえに、付いた字が、死神。なるほど。最高消費者か、確かにそーだな」

「それで？ 対処法は、当然変わるんだよね？」

「どーしても、喰うってか？」

「うん。だって、美味しそうだから」

即答かよっ！！

「いや待て、口封じっていうなら、オレが黙ってれば済む話だし」

「それただの口実だから」

あつさりと暴露しやがったよ！

わからなくて当然だよ、こんなの。ばあちゃんに聞いてたのと話全然違うし。どこがいい子なんだよ、コレの何処が！？ あんたの孫、喰われそーになってるっつーの！！ 孫娘同然のように気に入ってるとか、実の孫の命がヤバイっつーのっ！

「それじゃ、続きやろうか」

「オレが勝つたら見逃してもらうぞ。お前の事は黙っておくから」

「命狙われてるのに、優しいね。甘いつて言われない？」

「っさい！」

「それで、どうやって勝敗決めるの？」

スルーかよ！

「……オレかお前が、ダウンするまで」

「わかりやすいね、いいよ。まあ、あんなおじさん達相手に苦戦してるおにーさんに、私が負ける訳ないんだけど」

……あれだ。オレが勝つたら、黙っておくけど、その性格、矯正するよう言おう。

「オレはまだ死にたくないんだよ」

「さつき殺されかかってたのに」

ぐっ…。

普通にぶん殴りたい。つーかどこをどうやると、ここまで見かけとかけ離れた性格に育つんだっつーの！！

「オレが勝つたら、ケツ100叩きも追加する」

「セクハラ」

「安心しろ、お前みたいなお子様に興味はない」

「興味があろうとなかろうと、やられた本人がそう感じたらセクハラになるんだよ。知らないの？」

「勝敗に組み込んでるんだ、ただの敗者への罰ゲームだろ。それとも何だ？　口で言うほど勝つ自信がないってか？」

「おにーさん、挑発ヘタだね」

「……うるさいよ」

「慣れない事はしない方がいいよ。どう見ても、おにーさんは、いじられて、からかわれるってキャラだよ。残念ながら」

「っさいわー！！」

「雪”を右に構えて走り、振り翳して斬りかかる。

「正直な反応だね」

言いながら右へと避けて“雪”は宙を斬り、すぐに後を追って右斜めに斬り上げるがやっぱり宙を斬る。だが、今度は相手の手が伸ばされて“雪”で払おうとしたら、後方へ跳躍して逃げられた。

「“雪月花”は便利だね。扱えるなら、担い手の意思で、他人の

“魔力”を取り込めるんだから」

「お前にはかなり有効な手だろ」

「当てられるならね。先に言っておくけど、白羽取りなんて馬鹿な真似しないよ？　以前、一弥さんとの模擬戦で痛い目見てるからね」

何っ！？

兄貴いゝゝゝっ！！

余計な事をおおお！！

兄貴のせいで、

兄貴曰く可愛い末っ子は帰らぬ人になる確立が更に上がってるよ！  
「それと、忘れてるみたいだけど。私、三流とは言え、人狼4人分の蓄えがあるからね」

……………  
「そ、そういえば！？ 谷口を皮切りに、丸々喰ってんじゃねーかコイツ…。」

「稀に見る強い“霊喰い”ってのは、嘘じゃないってか」

「おにーさんが本気じゃないからわからないけど、今のおにーさんなら、食べても、全然余裕あるよ」

「さいでつか。フーかアレで満足してくれねえ？」

「嫌。不味かつたし、足りないし。おにーさんは美味しいから、口直しにもってこいだよ」

「それはどーも」

「どういたしました」

「“雪”！」

フェイントを2発入れて、“魔力”を通して、直斬り。捕らえた

！

「“壁”<sup>ヘキ</sup>」

「ばちつて音がして、“雪”が停止する。眼前で。」

「符術っ！？」

「乃木家は、今は術師の家系で、符術は、両親とも得意な上に、母さんの実家ではお家芸だよ」

「淡々と解説するその左手の符咒は、自然の法則に逆らって、直立で、静電気みたいなのを発生しながら、“雪”を塞ぎ止めてる訳で。」

「どんだけ効果発揮してんだよ、“雪”を防ぐって！！」

「何で“霊喰い”が符術なんか使うんだよ！！」

「便利だから」

「必要ねえだろ、全然全く！ 触れるだけでいいのにつ！！ つー

かそんな“霊喰い”ありえねえ！」

「わかつてないね、おにーさん。そんなだから、昔の“霊喰い”は人間に殺されたりしてたんだよ。それだけだったから。物理攻撃に弱いのがわかってるのに、防ぐ手段を手にしなかったせいだね。ちなみに、私が覚えたのは便利だからだよ。符術って言っても、これしか使えないけどね。壁を創るだけ、でもそれで十分でしょ？」

別の符咒を右手に、上目遣いに薄笑みを浮かべて、  
「獲物を逃がさないためにするには」

「ふざけんなっ！」

“雪”に込めたモノを四散させて眼くらましをし、後方へ飛び、間を取る。何てーか、こっちの飛び道具効かない時点で、間合いとるのはどうなんだよって感じはするが、居合抜きだけなら避けるってことは当たればダメージがあるって事だろうし。

てか、普通にぶん殴りたいんだけど。

「やっぱり“雪月花”は凄いね。符咒が一回でぼろぼろ、これ、お父さんのお手製なのに」

呟く科白に、思わず頬が引き攣る。

父親って、アレか。乃木管理者にして、北斗以外のSSクラス。そのお手製符咒ってか。……っーか、凶器、子供に持たせるなっ  
ての。

「使う時と場合を心得てるから、凶器にはならないよ」

「人の思考を読むな!!!」

「おにーさん、正直に顔に出すぎだよ」

右手に符咒を持ったまま、地を蹴る。

「お前は無表情の上に尊大で慇懃無礼で、性質が悪いわっ!!!」

「酷いな、そこまで言われる筋合いないよ。“壁”」

斬り付けた“雪”を符術で防いで、左手を伸ばし、

「ちっ！」

半身になってすんで避けて、そのまま後方バクテンジャンプで上空へ逃れる。

「携帯鳴ってる、お父さんかな…」

音は聞こえないが、そんな暢気な事を口にして右手の符咒を、投げる。ぺらッぺらの紙の筈のそれは、硬い長方形のモノであるかのように真っ直ぐオレ目掛けて飛んで来たから交わり、

「爪が甘いね、おにーさん」

そんな声が届いた。

「壁」

その言葉と共に、オレの顔の右横で、正面が見える状態で、符術が展開する。

「がいつ!?!」

右肩を寸断するように壁が展開し、オレはそのまま落下した。

で、落下地点に悪魔が駆け寄ってるわけで、もう必死に“雪”を縦にして、

錐崎を吹っ飛ばした蹴りがそこに炸裂した。

勢い付いたまま斜め上空に吹っ飛んで、再び落下。葉っぱが受け皿に……なるわけもなく、若干衝撃を和らげてはくれたものの、その分、枝にダメージを負わされて、最後に強かに背中を打って終了。

一瞬、呼吸が止まった。

「勝負ありかな？」

動く気配はなく、そんな事を聞いてくる。顔を声のする方へと向けると間に木の幹が1つ、どうやらあっち側から飛ばされて、こっち側へってか。どんな蹴りしてんだっつーの…ガキのくせに。

「…オレが左に避けるように、投げたんだな。右に避けて展開したら、心臓寸断で即死だから」

「うん」

「マジで、場慣れしてんだな。普通、あんな風に壁造る符術は展開しない」

「基本的に身を守る術だからね。尤も、事前準備がないと流石に四方には張れないけど。でも獲物を逃がさないためなら、一面で十分だから、ぶつかってる間に追いつけるし。生きるためにやってるか

ら、私も必死なんだよ。まだ、死ねないから。どうしても  
「そっか」

それでも放さなかった“雪”を手に、背後の木に寄りかかるよう  
にして状態を起こす。

「丈夫だね、おにーさん」

「……オレも、まだ死にたくないんだ」

「そう。それじゃ、仕方ないね」

「ああ」

背後で気配が動く。急ぐ気はないのか、ゆっくりと歩いてるらし  
い。

「まったく、余裕だなあコンチクショー。」

「ああ、でもまあ、しよーがねえかあ。」

「ちつと待ってる。すぐに済むから」

「何が？」

「足りねえんだろ？」

「どういう意味？」

「オレもさ、ばあちゃんに頼んでかけてもらってんだよね。これ。

自分でだと弱いから。ただ、今、空っぽだから、不安は残るが」

「近づく気配が止まる。」

「どうせ喰われるなら、全部持ってけよ」

「負けを認めるって事？」

「もうちつと粘れっけど、その分、消費するし、色々。そうすると、  
お前の取り分減るからな。こっちに逆転のチャンスはねーし、そう  
した方がいいだろ」

「随分潔いね」

「お前じゃなかったら、“雪”に全部喰わせて、暴走させて、このへ  
ン更地にすんだけどな」

「そうしたら？ 多分、私にそれ、避けられないよ」

「それだとオレも死ぬから。それに、どっちかがダウンするまでっ  
てルール決めただろ。オレが先にダウンした、それだけだ」

「そう」

「あー… 10年ぶりくらいだなあ、元に戻るの。2度とねえと思っ  
てたけど」

左手の“雪”を眺めて、柄を握りなおす。

「“雪”、頼んだ」

刃を腹に差し入れる、所謂、切腹。

…………… ギャグでも何でもないので、笑うなよな。

“雪”は喰らって力を発揮する、基本、“魔力”を。だから、オレの躰にかかっている術を解くためにやっているんであって、斬ろうとしている訳じゃないから、躰に傷は付かない。まあ、どういう原理なのかはさっぱり不明。五体満足だったら真つ当な方法取るが、右手使えないからこの方法にした。1番手っ取り早いしな。

右肩の痛みが遠のく感覚、自分の気配が遠ざかる感覚、枯  
渴する感覚。

俯き加減だった顔にかかる前髪の色が変化し、視覚もこれまで以上に見えるようになって、気配すらも様変わりするのがわかる。

「おにーさんの方が、やっぱり上等だよ」

「そりゃどーも」

軽く答えて、顔を上げて幹に寄りかかる。やっべ、予想よりキツ  
イ。

“魔力”が枯渴してて、さらに重症だもんな、元に戻るって、両方ぴんしゃんしてれば平気でパワーアップなんだろうが、この状態だと逆に負担か、やっぱり。右手は沈黙しっぱなしだしな。つーか肩の傷が全く痛くないんだが。あれか。もう死ぬか、オレ？

俯いて、ゆっくりと、“雪”を引き抜く。

「乃木月乃。全部、お前に、くれてやる」

「うん」

返事がして、近づく気配。

「あー… 出来れば、急げ。あんま、もたねえ」

「大丈夫そうだけど？」

「少しはな」

伸びた両膝の上に、横に“雪”を置いて。

“雪”との付き合いも10年を数える。長いのか短いのか、わかんなーけど。まあ、お陰で、最後にちよっとは面目躍如って感じだな。“雪”を預かってなかったら今回来なかったんだし、オレが片付けた訳じゃないからそこは情けねえけど、伝わる話ではオレが4人を片付けたって事になりそうだし。

足音がびたりと止まる。

視線だけを動かすと、小さな足が視界の隅に入った。

せめて、中学くらいは卒業したかったけどなあ……。ま、しょーがねえな、自分で言ったんだし。他にも何か手はあったのかもしれないけど、オレの頭じゃアレが精一杯。

むしろ、あの4人を瞬殺した相手に、持った方だろ。ははは、情けねえのは変わらんねーけど。あー…いい感じに気も遠くなってきた。傷は痛まないし、苦しくはないから。

死ぬってイマイチわかんねーけど……　まあ、いいか。ただ死ぬんじゃなくて、他人の寿命延ばすんだし。蹂躪する相手じゃなくて、しっかり負けを認めた相手に。それに…ばあちゃんのお気に入りだかな。うん。

尤も、気休め程度にしかなんなさそー……　　って。  
いつまで立っても、手が伸びてこない。そこにいるのに、何もしない。

「どーした？」

躰に力が入いんねーな、もう。

右に躰を傾けるようにして顔をあげる。

「は？」

完全に気の抜けた、間抜けな声が出た。

だって、予想外もいいところだ。

半ば茫然と、オレを見下ろしていた姿に、眼があって、本気で驚いた顔をした姿に。

「そーいう、顔、出来んのか、お前」

思わず苦笑する。鉄面皮かと思ってたのに、意外すぎるな、こりや。

年相応の、驚いた顔。お子様全開で、ぼけっとしてるし。

「ど、して…？」

呟いたのは、本当に小さな声で。表情そのままに、驚いた子供の声。さっきまでの淡々としたしゃべりはどこいったやら。

「何、が？」

「だって、それ、私と、同じ色…。人狼なのに、何で、銀髪じゃないの…？」

「ああ。オレ、なりそこない、だから。オレだけ…。母さん、と、

同…じ…」

ぐらり、と躰が更に右に傾いた。

「早く、しろよ。…先に、死ん、じ、まう…ぞ」

そのまま倒れてくのを止められなくて、意識もどんどん遠ざかって、何か言ってるけど、もーわかんね。判別無理。完全にぶっ倒れて顔面打ったけど、痛みはなくて。

視界がブラックアウト、眼が空いてるんだか閉じてるんだかもわかんなくなつて。

あー……無理。

## 8 一つの結末は、新たなる始まり

あー…。

視界がぼやけてる。何処だここ？ …何してたんだっけえ？  
薄っすら開いた目は焦点がよく会ってなくて。

「っ？」

あー…何か聞こえる。

よく見えないけど、視線を動かして。

「……母さん？」

そこにあつた顔に呟く。

「あだっ!？」

べしつと額にチヨップが入った。

「寝起きにボケる余裕があるなら、もう大丈夫ね」

母さんが苦笑してそんな事を言う。

でも、確か、母さんはもう…。

「十郎太、まだ足りないの？ 本当、寝起きが悪いんだから」

しっかりと見える位置に手を構えて、にっこりと微笑ん…

あ

だあだだだっ!!!

連打で5発。

「これで起きたでしょう？」

にっこりと、変わらないの笑み。

「……よく見たら銀髪、母さん銀髪じゃないよ。」

「三知にい…?」

「はい、よく出来ました」

満足そうに笑って、多分赤くなってるであろうオレの額を撫でる。

「無事だったからよかったようなものの、流石に今回は無理をし過ぎ。後1歩で死ぬところだったの、わかってる？」

「え、えーと…?」

苦笑する顔に、瞼を閉じて考え込む。三知にいに頭を撫でられるのは結構好きだから、そこはいい。親父だったら逃げるけど。

オレ、何かしてたっけ？

もう一度三知にいを見ると、本当に心配してたんだなってのがわかって…。

「…って、ああああっ！！」

「大きい声を出さないの」

ずびしつとまたチョップをくらい。

「三知にい、オレ、生きてんの？」

だって、死んだ筈だ。負けて、喰われてる筈だ。魂ごと。

そう、あの外身と中身のギャップ有り過ぎる“霊喰い”、乃木月乃に。

「まだ寝惚けてるの？ もっと強いんじゃないと、起きられない？」

言いながら、カチャって音がして、オレの頭上に“月”を構える。

「“月”……って、あ、いや、三知にい、それちょっとやりすぎだからーっ!？」

「大きい声を出さないの」

ばしつと、青白い鞘で顔面を打たれた。真面目に星が舞って、くらからする。生きてたのを確認した直後に、死にそう…。

「生きてなかったらここにいないわけじゃないでしょう？ ……十郎太、記憶障害とか起きてないでしょうね？」

「い、今ので飛んだかも…」

「そう、それなら、ショック療法でもう一つ 「いや、いい！ 大丈夫っ！！」

“月”の鞘を押しよけるようにして、慌てて躰を起こす。

そうしてから、ぱちくりと目を瞬いた。

「オレの部屋？」

「そう。怪我とか色々酷かったから、向こうで応急処置だけして、

ここで療養。昨晚落ち着いたから、部屋に戻したの」

「……何で生きてんのかな？」

ぼつりと呟いたオレに、三知にいの苦笑が返る。

「運が良かったから、としか言いようがないでしょうね」

「……そーなの？」

どこをどうやると運が良かったになるのかさっぱりだが。何でオレ喰われなかったんだろうな？　そこらヘンが、運が良かったってのになるのか？

「十郎太、状況が切迫していたのはわかるけれど、今回の事は本当に無理をし過ぎ、私怒ってるのわかる？」

「……ごめんなさい」

兄貴には色々な意味で全然勝てないけど、記憶に全くないとは言え母さんと同じ顔をしている三知には全然頭が上がらない。そういう意味で、確かに、オレは甘やかされてんだろーけど…。

「宜しい。…勿論、父さんにもきつく言っておきましたからね」

「え…？」

「幾ら人手が足りないからって、十郎太を行かせるのはやり過ぎ、結果だけを見れば無事に帰って来てるし、いいのだけれど、それでも、彼等の相手をさせるには十郎太はまだ早い。発見と治療が遅れてたら、本当に死んでたんだから」

「…うん」

「だから、父さんにはきつい、お急を据えておいたから」

につこりと笑ってそんな事を言う。……母さんと同じ顔してるから、父さんも三知にいは弱いからな。オレが本気で嫌がっても止めないし、誰が止めても同じだけど、三知にいが言うとすぐやめるし。

「それから、十郎太はきちんとお礼を言わないと駄目ですからね？」

「お礼…？」

「さっきも言ったでしょう？　発見と治療が遅れてたらって」

「…三知にいが見つけたんじゃないの？」

「違います」

「じゃ、三知にいと同じ、追手の人ら？」

「違います」

「え…？ じゃあ…」

誰が、という科白は、ノックする音に阻まれて。柱を。

その後少しの間を置いて襖が開いて、兄貴が顔を見せる。何でか顔は横向いたままだけど。

「三知、将道まさみちが来てる。お礼と謝罪に。根性だな、あんな状態で来るんだから。嫌だろうが、顔を出してやってくれないか？」

言ってから視線を室内へと移して、オレと目が合ってから険しかった顔が微笑む。

「十郎太、起きたのか」

「あ、うん」

「気分はどうだ？」

「全然大丈夫」

「起き掛けにボケるくらい、いつも通りです」

三知にいが溜息がちにそんな事を言ってから、兄貴に視線を移す。

「将道さんは悪くないのに、弟の不始末で色々大変でしょうからね」

「お前が言うか、それを…」

「弟を止められなかった兄の責任は当然ありますもの」

平然と言い切る三知にいに、兄貴がえらい苦笑いしてる。……何で？

「将道って誰？」

「敬称が抜けてます、十郎太。立場だけなら私より上な方ですし、年も実力も十郎太よりずっと上です」

「……将道さんって誰？」

じろりと睨まれて、思わず言い直すオレ。その様子に、兄貴が溜

息を1つ。

「三知がここ2年組んでたチームのリーダーで、今回の逃亡劇の首班、錐崎竜道の兄」

「なるほど」

「謝られても、冬悟も沙奈絵も帰ってこないのに……。半殺しにされた相手に対面を願い出るなんて、本当に太い神経してるのね」

「淡々と呟いた三知にいに、オレは思わず躰を引いた訳で。」

「仕方ないので、お会いしてきます」

「本気で嫌そうではないにしろ、少しだけうんざりしたような声音で言って、立ち上がる。」

「そうしてやれ。それと、言うまでもないだろうが、アレ以上怪我を増やさせるなよ？ 今後の業務に支障が出る」

「今更1つ2つ増えても変わらないでしょう？」

「並び立つ2人の兄の不穏な会話に、思わず視線を逸らすオレ。笑顔で冷氣漂わせて普通に会話する中に入れるほど、大人でもなければ、心臓が強い訳でもないから。」

「将道は変わらないが、お前に問題が出る。前回は理由が理由だけに多めに見てもらえたが、これ以上は無理だから。謹慎にでもなったら支障が出るだろう？」

「……そうですね。わかりました、大人しくしておきます」

「足りないなら、いい相手がいるからそっちで息抜きすればいい。条件次第で本気でやってくれる」

「平常時の兄さんと互角に渡り合う相手にですか？」

「気晴らしにはなるだろ」

「それは……。そうですね。考えておきます」

「代価高いけどな」

「肩を竦める兄貴に、同じように返す三知にい。」

「それでは、兄さん。十郎太の事、お願いしますね」

「ああ」

「そう言って、三知にいが部屋を出て襖を閉めて、兄貴がオレの傍」

に腰を降ろす。

「躰の感じはどうだ？ 違和感とかは？」

「あ、うん…全然平気。 兄貴、あのさ、オレ、何で助かったのかな？」

「見つけてくれた人が、治療してすぐに連絡してくれて、管理者の乃木さんから父さんに連絡入って、それで」

「そうなんだ」

もたもたしてて喰い損なったのか、案外間抜けだな、アイツ。

「でも、それも運が良かったからだ。 幾ら何でも無茶し過ぎだぞ」

「運って…。 三知に何もそう言っただけ、そりゃ、無茶はしたけどさ、でも」

「でもじゃない。 無事だったからよかったけど、本当に心配したんだからな」

「う…。 ごめんなさい」

「ま、終わった事だからもう言わないが。 …改めて、お帰り、十郎太」

「うん、ただいま…」

「で、躰の方は本当に大丈夫なんだな？」

「うん」

「そっか。 それなら…どうする？」

「何が？」

「いや、そのままでもいいなら別にオレは構わないけど」

苦笑して、右手をオレの頭に乗せて撫でる。

「折角綺麗なんだ、隠しておくのも勿体無いと思うからな」

そう言われてから、気付いた。 そういやオレ、術を解いてた。 て、事は、だ…。

「親父に見られたら大変な事になる」

「……… そうだな」

愕然として呟いたオレに、一瞬だけ硬直した兄貴が苦笑して同意した。

筆頭に上げて心配しないといけないのはそこじゃないのはわかっているけど、オレにとっては最重要死活問題だ。主に精神面で。

「ばあちゃん、いんの?」

「ああ、お前が目を覚ましてから本人の意思でって待ってるよ」

「そっか、じゃ、頼んでくる」

「やっぱり隠しておくのか」

「……そういうわけじゃないけど、慣れないし」

「そっか」

見慣れないってのは本当。何しろ10年近く見てないんだから。でも自分で変化させたのじゃ弱くて、オレの目じゃ見える訳で、鏡見るたび目にするのは、正直辛くて。

ていうか、母さん云々とか周りに色々言われて云々とかに加えて今回の“霊喰い”遭遇も思い出して凹みそうだし。

「どっか、へんじゃない?」

「へんって?」

「いや、兄貴から見て、どうかなって……」

「別にへんとは思わないよ。母さんの髪と、爺様の眼だろ。そりゃ確かに、外見と本性がかみ合っていないのはあるかもしれない。

でも、そんなの関係ないだろ、十郎太は間違いなくオレの弟で、父さんと母さんの息子って確実な証拠じゃないか」

「うん……」

「あらぬ噂が立ってるのは知ってるけど、それだって、“雪”を使ってるんだから戯言だって証明してる」

「うん……」

「オレとしては、そんな感じなのに、何でそうなのかなって不思議でならない」

「……………何が?」

「自覚ゼロだから教えてあげない」

満面の笑みで、あっさり言われました。

いや、てか、何の話……? それまでシリアスでわかりやすい話だ

ったのに、何で急にわけわかんなくなるんだろ…。

「ヒントとか」

「そのまままで1週間も過ごせば気付くと思うよ」  
「爽やかな笑顔。」

「どうやら、言いつもりはさらっさららしい。」

「…わかった。んじゃ、1つ聞きたいんだけど」

「うん？」

「オレの事助けてくれた人にお礼言えって三知にいわれたんだけど…」「ぐうぐうぐう」

……………。

真顔で真剣な話をしたのに、オレの腹は何で鳴く!?

で、何で兄貴は笑いを堪えてんだよ!! ちくしょー。

「…ああ、怒らない、怒らない」

笑いながら言われても納得出来ないよ!!

「無理もないよ、丸2日寝てたんだから」

「……は？」

「一昨日の夜発見、で、今までずっと寝てたんだから」

「…そんなに？」

「それだけ酷かったって事。魂まで“雪”に与えて欠けた状態で、半死半生の自覚あってそこまで驚いてるなら、オレ、怒るよ?」

拳を握り締めて、にこやかな笑みを浮かべる。

「いや、その、何ていうか、死んだと思ってたから…。生きてて良かったけど、ちょっと複雑」

「何が？」

「言われた時も、向かった時も、対峙した時も、本当、全然覚悟なんて出来てなかったけど。でも、諦めた訳じゃなくて、そういうのも有りかなって……思ったから」

「アイツに喰われるなら、いいかなと思ったのは事実で。言えないけど。」

勝ったのにオレ生きてるし、黙っておくってのくらいは守ってや

らないとな。好きで見逃した訳じゃないだろーが。

「死んでもいいとか、自棄になったんでもなくって。自分で納得出来てたっていうか……」

「そっか……。でもそれ、他の奴には言わないように。特に父さんにはね」

「……え？」

「最初に連絡受けて、父さん倒れたらしいし、その後も、やる事なのに、仕事丸投げして様態が安定するまで、ずーっと傍に付いたから。何だかんだ言っても、父さんにとっては、十郎太は1番可愛いんだからさ」

「三知にいい間違いじゃねー……？」

オレの科白に、苦笑が返って。

「三知は確かに、母さんに瓜二つだけど。父さんにとって母さんの思い出、1番思い出せるのは十郎太なんだよ」

「何でオレ……？ 母さんに似てるのって、髪くらいなんだろ？」

「うん。十郎太は父さん似だからね」

あっさりとそれを口にする兄貴に、思わず顔を顰める。

それに右手を伸ばして、ぽんぽんオレの頭を軽く叩いて。

「不満そうな顔しない、自分でもわかってるくせに。でも、だからこそ、母さんと会った頃とか思い出すんじゃないかな。多分ね」

「む……」

「とにかく、さっきの話はここで終わり。誰にも言わない、わかった？」

「………わかった」

「父さんそれ聞いたら卒倒して、北斗引退とかしちゃって、長も引退しちゃって、多分、24時間監視体制で十郎太を監禁するよ。家に。それでもいいなら言ってもいいけどね」

ひくり、と頬を引き攣らせるオレに、兄貴は満足げに微笑んで。

「納得したみたいだね？ それじゃ、食事の用意するように言ってくるね。お昼の時間過ぎてるから、夜まで待てないだろうし」

「あ、うん。有り難う」

「どういたしまして」

頷いたオレの頭を、またぼんぼん叩いて、立ち上がる。

襖を開いてから一瞬動きを止めて、思案するように首を傾げてから肩越しに振り返る。

「マミーも付けるから、着替えて居間においで」

「え……？ あ、うん」

頷いたオレに、何でか含み笑いをして兄貴は去って行った。

あの笑みは何だったんだろう……。

兄貴は親父みたいな食事への有り付き方をオレに強いたりしないだろうし、いや、流石にこの状況なら親父も素直に飯くらい食わせしてくれるだろうが……。多分。

「ぐうううう〜」

……。

食べ物の事考えたら本当に腹減ってきた。

ついでに喉もエライ渴してる。むしろこっちのが酷いかも。……

ヤバイな、うん。やっぱり駄目だ。早めにはあちゃんに頼まないと。

オレは、嫌だから。

「よし！」

気合いを入れて掛け布団を捲って立ち上がり、脱力した。

………。何で浴衣なんかなあ。部屋に移した時点で、着替えさせておいてくれればいいのに。この柄はアレだなー八乎やいのお古か。

まあ、八乎に曰く、四真まいのお古らしいが。兄弟多いと、どーしてもお古の連鎖だよなあ。こんちくしょー。

ぶつぶつ言いながら筆筒を開けて、ジーンとTシャツ、念の為にパーカーを取り出す。

「……。昼間ならいらなかなあ」

そう言いつつも浴衣を脱いだら寒気がしたから、しっかり着込んで。準備万端。

布団をたたんで、上に浴衣を投げて、部屋をぐるっと一周見回して、生きてんだなあ…とか再確認。

「マミーがオレを待っている!!!」

気合いの雄叫びを上げて勢いよく襖を開き、

「その前にする事があると思うよ？ 礼儀として」

全身が硬直すると同時に、上から下まで悪寒が走りぬけた。

……げ、幻聴？

今、凄くありえない声が聞こえたような気が。

固まったまま、ぎぎぎっ…て音が聞こえそうなくらい機械的な動きで左右を見回して。

「……空耳か。そうだよな、はー。ありえねー…」

「本当に失礼だね。小さいのは認めるけど、おにーさんだって大きい方じゃないでしょ」

……聞こえない、聞こえない。

それは、左の足元からするんだけど。母屋は右手側の廊下を進んだ先だし、うん。気のせいだ、気のせい。見ないでおこう。

くるりと小さく右回れし、背を向ける。

「そういう態度、取っていいと思ってるの？」

1歩踏み出したオレの服が突っ張る。

……夢だ、コレは。そうだ、きつと極彩色の悪夢。いや、もしかしたら、マジでオレ、死んでるのかもしれない。んで魔されてる。

……死んでも魔されるかどうかという突っ込みは却下で!!!

「本条十郎太、それ以上無視するなら私にも考えがあるよ？」

ぐはっ!? 名指しされたーっ!!!

しかも何か背後から冷気が漂ってるよお。ううう、母さん、オレ、そっちに行った方がよかったよーな気が物凄くしてきたよ…。

本気で、恐る恐る、振り返る。

白い髪と紅い眼の悪魔が冷笑してた。

「……な、何でここにいんの？」

「人の顔見て開口一番がそれ？」

オレより30センチは確実に小さい身長で、何で上から目線なんだろうな、コイツ…。

「……こんにちは」

「おはよう、じゃない？ おにーさんの場合」

「オハヨウ」

「おはよう」

「んで、乃木月乃、何でここにいる？」

「おにーさんが起きるの待っててあげたんだよ」

「…そりゃ、どうも。つーか、何で？ 誰かに見つかって喰いはぐつたんじゃねえの？」

「私がそんな間抜けな訳ないでしょ。失礼だね」

「……。くそ、兄貴に本当の事しゃべっとくんだっ！」

「そんな事より、人狼って本気で頑丈なんだね」

「…まあな。んでさ、服、伸びるから引つ張るのやめてくんねえ？」

「だって逃げようとするから」

「悪いかよ！！ つーか、何でここにいんだよ！ 訳わかんねーよ、

コンチクショー！。

「逃がす気はないってか？」

「別にいいけど。でも、そんな事したら、おにーさんがみんなに怒られるよ」

「は…？ 何で？ お前にぶべっ！！」

顔を強かに打った。

「腕を上げたな、十郎太」

次いでそんな声が頭上から聞こえて、鼻を抑えながら顔を上げてみれば、大元の元凶が、むしろオレの厄災がにこやかに笑ってやがった。

「親父…」

「ふむ。気配を完全に消してたし、月乃ちゃんと暢気に話してたから気付いてねーと思ってたが。残念」

わきわきと両手を握ったり広げたりしてて。

いや、何の話…？

「しかし、親子の感動の抱擁を避けるとは、いただけんなあ」

「思春期だから、きつと照れてるだけです。将和さん」

えっらい可愛いー声が、親父のフォローに入った。

「男の子はそういうものだって、お父さんが言っていましたから」

年相応の可愛い笑みを浮かべて、そう続ける。…ちよつと待て、

何だその変わり身！！

「そうか…。月乃ちゃんは優しいねえ」

しみじみと頷く親父。つて、待てや、何馴れ合ってたんだよ！！

オレ、そいつに殺されかけたんだっつーの！！

「で、十郎太。いつまでなっさけない格好でいるつもりだ、しゃきつとしろよ」

好きで寝転がってる訳じゃねーよ。

つて言えたらいいが、言えないオレは、釈然としないまま無言で立ち上がる。つーか、何で転がったんだよ？　そもそも自分の意思で避けたら顔面打ってねーよ。

「それで、何だよ、親父？」

「何だよじゃねーよ。お前、月乃ちゃんにお礼は言ったのか？」  
は？

思わず目が点になる。何で命狙われてた相手に礼を言わなくちゃなんねーんだよ？

「あゝ、何だ？　その顔はわかってねえな？」

「何が？」

「そりゃ戦闘中に月乃ちゃんに遭遇して、気付かねーで庇いつつ交戦とか、カツコイイけどよ？　本気でやって、殲滅したのはいいが自分も瀕死つて、男としてちよつとばかし情けなくねえか？」

は？

何の話だ、そりゃ…。

「それで、名乗らずに去るとかならカツコイイけどよ。そーじゃね

えんだもんよ。ぶつ倒れたお前を介抱して、恭一に連絡して、あ、恭一ってのは月乃ちゃん父親で、あそこらへんの管理者な。そんでオレんとこ連絡来たんだが、月乃ちゃんがいなかったら、お前、今頃あの世だぞ？ほんつとに情けねーなあ」

思わず頭を抱えた。

あー……何だ、誰のホラだ、それ。って、言うまでもねーよな。

ちらりと視線を流すと、にこにこ年相応の笑みを浮かべてやるし、この悪魔。何だよそれ、エライ豹変しすぎだろ。

「私も助けて貰ったから、お互い様だと思えますよ？」

平然とそんな事を言う悪魔。

「控えめだねえ、月乃ちゃん。ガツンと言わないとわかんねーんだよ、この馬鹿息子は」

「でも、怪我をしたのも私のせいだから」

せいっつーか、お前のが1番の致命傷だっつーの！！

「あーまあなあ、身を呈して庇うとかな、それで自分が死にかけてちゃ世話ねーよ」

「仕方ないですよ、一般人だと思ったんだし」

「そこも情けねえんだが。ま、しょうがねえ。まだまだだかな、

十郎太も。 ……とりあえず、ほれ」

顔だけ向けて言いながら紙パックを投げ………って、マミーっ！！  
がっちりキャッチ。

「さんきゅー」

「オレの息子なのにマミーとかなあ」

「るっせ」

言いながらストローを指して、早速飲み始める。

「ま、それで持つてるなら別にいいんだけどよ」

「……それが主食なの？」

軽く驚いた声と顔で疑問の声が上がった。

何っつか時々、ほんつとに時々だけど、普通の可愛いお子様だな。見た目だけは。

「そーなんだよ、月乃ちゃん。笑ってやってくれよ。人狼一族最強の血族、“人狼吸血鬼”ともあるーもんがね、血いじゃなくてマミーなんだよ、コイツ」

オレの頭をがっしりつかんで、わしゃわしゃ撫でながらそんな事を言う。

「るっさいよ。普段出ないから、これで十分なんだよ。っーか足んないんだけど？」

500mlをあっさり飲み干して、パックをたたみながら尋ねる。それに対して、親父はこれ見よがしに両手を振って返してくるし。

「一弥が居間に用意してたからそっちにあるだろ。まあ、手遅れになつて月乃ちゃんに襲い掛かれても困るから、持ってきてやったが。感謝しろ」

「ドウモアリガトウ。つて、誰が襲うかつー!!」

「どーだかな。お前、初期段階をロクに経験してねーで育つてんだろ。普通は成長過程で自制を覚えてくんだよ、でもそれをすつとばしてるからな。可能性はゼロじゃねーよ」

「……絶対ないね!」

「暫くマミー厳禁にして試してみつか？」

「ごめんなさい」

横目で言う親父に、即座に謝るオレ。マジそれは勘弁っ!!!

「んな事されたら、オレ死ぬ」

「別に死にゃあしねーよ、そんなすぐには。ただちよつとばかし、凶暴になるだけで」

あっさりとんでもない事言ってますよ、この親父。

「ああ、それと。月乃ちゃん」

くるりと顔の向きを変えて、オレを放置しやがるし。

「はい？」

「お袋が準備できたって言ってたぞ」

「本当ですか？ よかった。わざわざ有り難うございます」

本気で嬉しそうな顔をしてそう言って、丁寧に頭を下げて最敬礼。

オレに対する態度と違い過ぎねえ…？

「いやいや、礼を言われるほどの事じゃないよ。んじゃ、また後で」

しゅたつと片手を軽く上げて、疾風のよーに去って行く姿を思わずじと目で見送った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8392t/>

---

喰

2011年9月19日03時22分発行